

ドストエフスキーを読むー『カラマーゾフの兄弟』を中心にー
小嶋 祥三

ドストエフスキーを読む
ー『カラマーゾフの兄弟』を中心にー

まえがき

犬山の京都大学霊長類研究所に在職中は、自動車、自転車、徒歩通勤だった。慶應義塾に移ってからは電車、それも地下鉄を乗り継いで通勤した。外を眺めることもできず、本を読むようになった。ドストエフスキーの小説の文庫本（無論、邦訳）を処女作の『貧しい人々』から最終作の『カラマーゾフの兄弟』までを買いこみ、年代順に読んでいった。どの小説も少なくとも3回は読んだ。ある翻訳に飽きると、別の翻訳で読んだりもした。

以下の文章はその時考えたり、感じたりしたことである。ネットの関連サイトに投稿したものに手を加えたものがかかなりある。一応、『カラマーゾフの兄弟』を中心にしているが、必要に応じて、あるいは気の向くまま、他の小説にも話が飛ぶのをお許しいただきたい。ロシア語は読めない全くの素人の文章である。素人の特権はロクに文献に当たらず、思ったこと、考えたことを自由に述べることだろう。この特権を存分に行使させていただくつもりだ。また、歳をとり億劫になり、もとの文章に当たらず、記憶に頼って書いていることもある。要するに、厚顔無恥を極め込むことにした。人生の旅の恥はかき捨てということでしょうか。

文中、文庫本をいろいろな形で引用させていただいた。引用が多かった小説、訳者、出版社をあげておく。

『罪と罰』 工藤精一郎 新潮文庫

『白痴』 木村 浩 新潮文庫

『悪霊』 江川 卓 新潮文庫

『カラマーゾフの兄弟』 原 卓也 新潮文庫

I. 登場人物たち

A. 全員集合：カラマゾフ家の人々

1. 「作者の言葉」から

『カラマゾフの兄弟』には作者の前書きがある。それによると、三男アリョーシャが主人公の小説は2部あり、この小説はその初めのものだという。しかし、ドストエフスキーは『カラマゾフの兄弟』を書いて数カ月のちに亡くなってしまったので、中心となるはずの続編は作家の死とともに永遠に書かれることはなかった。仕方がない話だが、それを読んでみたかったと多くの読者が思っている。そのような人の中に、勝手に続編を考え、本にまでする輩も現れる。しかし、それはドストエフスキーに失礼だろうと思う。確かにこの小説の中には続編につながるような部分がある。それは小説の欠点となりえるが、そのようなことは問題にならないほど内容は素晴らしい。作家が続編のプランを持ったままあの世に行ってしまったのは残念だが、続編なしでもこの小説は十分に完結しているように思う。処女作『貧しい人々』に、死んだ息子の棺の後をオロオロとついていく父親ポクロフスキーが描かれている。最後の小説『カラマゾフの兄弟』でも、小説の最後に我が子イリューシャを失ったスネギリョフがやはり棺の後をオロオロとついていく。作家の中で輪が閉じた印象を持つのは私だけだろうか。

『カラマゾフの兄弟』のストーリーはフョードル親父と長男ドミートリイが、思想的な面は次男イワンと三男アリョーシャが担当している。初めのほうに、物語前の親父と兄弟たちの紹介がある。ここではフョードル親父と4人の息子（一応、父姓が同じスメルジヤコフも入れておく）の子供時代から青年時代の話、すなわち、かれらがこの町に戻って来るまでを中心に述べる。この町に来るまでのかれらの紹介は簡単なもので、長くはない。それゆえ、その後の小説の内容を予測させる、かれらの本質的な部分、核のような面が述べられていると期待したい。

2. フョードル親父

しばらく町を離れていたフョードル親父が物語の舞台の町スコトプリゴニエフスク（家畜追込町。変な名前を付けたものだ）に戻ってきたのはアリョーシャがやってくる4、5年前だったというから、それほど昔ではない。財産管理、要するに金儲け以外は道化と好色でできているような人物である。自らの不名誉を自慢げにアチコチで吹聴し、相手の優越感をくすぐり、内心はオマエも同じだと、相手に向かって舌を出しているようなところがある。歳をとってシマリがなくなり、涙もろくなっているが、マズイ女に出合ったことがない！（ただし、最初の奥さんを除く）と豪語する性欲方面も相変わらずである。それが悲劇を生むことになる。

フョードルは鉤鼻だったが、かれはそれをローマの貴族風と自慢していた。少なくとも

20年ほど前のかれにも前髪があった。イワンとアリョーシャの母親を養育していた將軍夫人にそれを掴まれて三度も引き下ろされている。しかし、20年後にはわずかな髪が小鬢に残っているに過ぎなかったところをみると（それをドミートリイに掴まれて引き寄せられ、投げ飛ばされている）、頭髪はなかったようだ。

3. ドミートリイ（ミーチャ）

まず、長男ドミートリイだが、かれは最初の妻アデライーダの子供である。かの女はミウソフ家の出だが、ドミートリイを捨てて師範学校出の教師と一緒に出奔してしまう。ドミートリイは初め召使のグリゴリーに育てられたが、その後ミウソフ家に引き取られ、成長した。幼年時代、少年時代のことはほとんど書かれていない。かれの幼少時代の話は後に医師ヘルツェンシュトウーベが裁判の中で語る「1フント（400g）のクルミ」の中にでてくる。医師によると、ドミートリイは父親の家の裏庭に放り出されて、長靴もはかずに、ボタンが一つしかないズボンで走り回っていた。医師は見捨てられたこの子を憐れんでクルミ 400g を与え、ドイツ語で「父なる神よ」、「子なる神よ」、「聖なる神よ」という言葉を教えた。ドミートリイは3日後に医師に会うと、この言葉を繰り返した。そして23年後に生まれた町に戻ったかれは真っ先に医師のもとに行き、この言葉を繰り返し感謝の念を伝えた。このエピソードからドミートリイが情けをかけてくれた人に感謝の心を持ち続けていたことが分かる。そして、覚えていた言葉がキリスト教に絡んでいたことは、神がドミートリイを父親殺しから遠ざけたことを暗示している。

かれは陸軍にはいり、将校に昇進したが、決闘をしたりして、順調な軍隊生活を送っていない。退役して町に戻ってきた。軍隊時代は娘をからかい、放蕩、遊びの限りを尽くし、金遣いも荒い。フォードル親父が見抜いたように、軽率で、気性が荒く、激情家で、せっかちで、遊び人だった。しかし、医師に見せたような一面があったのだ。詩を口ずさみ、イメージにより啓発されるなど、詩人の一面を持つ。町に戻ってきた時は28歳だが、歳より老けてみえたという。筋骨はたくましいが、痩せて頬がこけていた。眼は黒く、出っ張りぎみだった。口ひげをたくわえ、栗色の髪を短く刈っていた。軍人だったので、立ち居振る舞いはきびきびしていた。

4. イワン

次男イワンと弟のアリョーシャは二番目の妻ソフィアの子供だ。ソフィアは補祭の娘で孤児だった。將軍夫人とのつらい生活から逃れるようにしてフォードル親父と結婚した。二人を生んでしばらくしてソフィアは亡くなってしまう。イワンもアリョーシャも結局召使のグリゴリー夫妻に育てられたが、突然乗り込んできた將軍夫人に引き取られた。イワンは知的に優れており才能豊かである。ポレノフという有徳の士のおかげでモスクワの秀才の集まる学校で教育を受け、大学に進学した。文筆の能力さらに実務能力も高いので、いろいろな手違いに起因する学生生活の経済的困難を独力で克服している。しかし、重要

な点がかれが他人のお情けで生活していることを、子供のころから常に意識してきたことにあると思われる。イワンは他者に依存することを極度に嫌悪している。この独立心は好ましく思えるが、かれは神からも独立しようとする。それは『悪霊』のキリーロフの「人神」の考えと共鳴している。後にスメルジャコフに親父そっくりだと揶揄され、誰にも頭を下げたくないのだと指摘される。イワンは身近な人をなぜ愛せるのか分らない。他者への共感よりも、嫌悪、侮蔑が前面に出てくる。これはかれが創作した劇詩の主人公「大審問官」と同じ傾向である。

イワンが町に戻ってきた時は24歳だった。イワンの容貌については、まったく記述がないようだ。それは不気味でもある。

5. アレクセイ（アリョーシャ）

一方、三男アリョーシャはイワンほどではないだろうが、それなりに優秀だという。恥ずかしがり屋だが、周囲の子供はかれを馬鹿にせず愛している。かれは中学を卒業せずに生まれた町に戻ってしまう。アリョーシャはイワンが感じていた苦痛をまったく意識しない。ミウーソフ氏が言ったように、困難な時にはだれもがかれに手を差し伸べ、アリョーシャはそれを負担に思わないだろう。しかし、かれは極楽トンボではなく、スネギリョフの心理解剖をして婚約者？リーザからたしなめられている。かれは他者への嫌悪、侮蔑とは無縁だ。町の修道院のゾシマ長老に出会い、仕えることを喜びとし、キリストの教えを信じている。イワンが父親に似ているのなら、アリョーシャは母親似で、それは小説にも出てくる。かれは教会における母親の思い出を大切に心に納めている。そもそもかれが小説の舞台となる町に来たのは、母親の墓を探すためだった。ヒョードル親父はイワンとアリョーシャが同じ母親から生まれたことを失念していたが、そう思うのも仕方ないほど二人の性格は正反対で、それが将来の話の布石になっている。

アリョーシャは健康でバラ色の頬をした20歳の美しい青年である。アリョーシャの両目の間隔は開いていたという。これは幼児の顔の特徴のようだ。いかにもアリョーシャらしいと納得できる。後にエソロジーが言うように、幼児は大人が養育しやすいように神様（正しくは、自然か）が創ったのだろう。イワンが言った「顔が醜い子供はいない」という言葉、また、ミウーソフ氏がアリョーシャについて吐いた名文句も同じことを指していると思われる。ドストエフスキーの生き生きとした、鋭い観察眼に感心する。

6. スメルジャコフ

スメルジャコフは宗教畸人スメルジャシチャの子供である。父親は誰だか分らないが、フョードルだとのうわさが立ち、かれは内心得意でスメルジャコフの父姓に自分の名前（フョードロウィチ）をつけること拒まなかった。スメルジャコフのみがファースト・ネーム（パーヴェル）で呼ばれることはない。やはり、スメルジャコフも赤ん坊を失ったばかりのグリゴリーイ夫妻が育てた。スメルジャコフの子供時代のエピソードで興味深いのは、

動物に対する虐待である。ネコを絞殺し、お葬式ごっこをしていた。グリゴリーに見つかりお仕置きをされると、片隅にもぐりこみ 1 週間ほど白い目でにらんでいるような子供だった。スメルジャコフは後にイリューシャ・スネギリョフの犬に針の入ったパン切れを食べさせている。

スメルジャコフは成長すると潔癖症的な行動をするようになった。そこでフォードル親父はかれをコックにするためにモスクワに修行に行かせた。かれは相変わらずモスクワでも人嫌いで通したようだ。町に戻ってきた時は急に老けこみ、皺だらけで、黄ばんだ顔色をしていた。しかし、料理の腕はフォードルを満足させるものだった。コックで得た収入はすべて服や靴などの身の回りのものに消えた。そしてテンカンの発作を示すようになった。テンカンについては別に述べる。

7. フォードル親父と息子たち

フォードル親父とドミートリイが金と一人の女性をめぐる争っていることはこの物語の表のテーマなので、いずれ詳しく述べることになる。ドミートリイは父親を、なぜこんな人間が生きているのだ、と言い、暴行したり、殺してやるなどと脅したりで、「父親殺し」の状況証拠を大量に残してしまう。親父とイワンは傍目にはうまくいっているようにみえる。しかし、ドミートリイに乱入され暴行された後、フォードルはアリューシャに、怖いのはドミートリイでないイワンだ、という。小説にはそのようなことをうかがわせる事件はないので、フォードル親父はイワンの中に恐ろしい面をみたのだろう。無論、これは小説の伏線になっている。イワンは父親を兄から守っているが、内心は父親を毒蛇だと軽蔑している。フォードル親父とアリューシャは円満である。アリューシャは父親の乱行を非難しない唯一の人間だった。何のために帰ってきたのかと、初めは疑いの目で見ていた親父も次第に心を軟化させる。アリューシャの修道院行きを許し、どういう気まぐれか多額の寄進（それもなぜか最初の妻の供養のため）を修道院に行ったほどである。年老いて箍がゆるんできたようだ。フォードルは自分を殺すことになるスメルジャコフを正直者とみなし信頼している（少なくとも全く警戒してはいない）。なお、イワン、スメルジャコフ（そして、グリゴリー夫妻も）はフォードル親父の家に住んでいる。

8. 兄弟の関係

ドミートリイはイワンを評価し尊敬している。一方、イワンはドミートリイをも毒蛇といい、父親とのいさかいを毒蛇同士が殺し合いをすると口走る。これもイワンからみた小説の筋を暗示している。ドミートリイはアリューシャを誰よりも信頼し、愛している。アリューシャもドミートリイを愛し、兄の激情を心配しつつも、基本的に信頼している。アリューシャは、ドミートリイがヘルツエンシュトウベ医師にみせた一面を直覚できたのだろう。父親殺しに関して、イワンと異なり、アリューシャがドミートリイを疑ったことは一度もない。アリューシャはドミートリイとすぐに打ち解けることができたが、同腹の

イワンとはそういかなかった。イワンはアリョーシャの意見をかれにとって大切なものと感じていた。イワンとアリョーシャが親しく話し合った最初で最後の機会に、イワンの「大審問官」が語られる。イワンとアリョーシャは神、キリスト教に関して、異なる立場に立っている。この対立がこの小説の思想的背景をなしている。イワンの「大審問官」とアリョーシャの「ゾシマ長老の談話記録」がそれぞれの立場を主張している。これについては別に触れることになる。

イワンとスメルジャコフの関係はこの小説の重要なポイントである。スメルジャコフはイワンの分身のような存在である。ドストエフスキーの小説には分身がしばしば出てくる。『二重人格』のゴリャートキンが分身そのものが主題であるが、『白痴』のムイシュキン公爵とイポリート・チェレンチェフは全然似ていないようだが、その苦しみにおいてとても近い。『悪霊』のスタヴローギンとピョートル、シャートフ、キリーロフも分身関係だ。イワンはスメルジャコフの「先生」であるが、かれとは召使として対応しているようだ。スメルジャコフを「やくざなろくでなし」と心中罵倒している。そしてイワンがスメルジャコフにみたものは、次第に頭をもたげてきたはかり知れない自尊心、傷ついた自尊心だった。スメルジャコフが示すなれなれしさ、ある種の仲間意識（「賢い人とはちょっと話してもおもしろい」）をイワンは嫌悪した。何か事が起こるとまずスメルジャコフのようなものが突撃し、その後にもう少しマシなものがでてくると、イワンは語る。これらも小説の筋に関係している。しかし、最終的にはイワンはその召使に「正体」を暴かれ、散々に愚弄されることになる。なお、ドミートリイはスメルジャコフを臆病者の召使としかみておらず、アリョーシャは、誰に対してもそうであるように、スメルジャコフに一人の人間として接しているようだ。ただ、父親殺しに関して、アリョーシャはスメルジャコフが犯人であると確信していた。この点、スメルジャコフに告白されるまで「分らなかった」イワンと大きく異なる。

ここで少し脱線させていただく。「きみは才能があるのに、非常に多くのことに理解を欠いている、なぜなら、きみが下劣な人間だから。」これは『悪霊』でキリーロフがピョートルに言った言葉だ。『カラマーゾフの兄弟』の語り手もアリョーシャの友人ラキーチンについて似たような意味のことを述べていたと記憶している。われわれの身の回りにもこの類の御仁が結構いるのではないだろうか。ドストエフスキーの人間観察に感心する。このような人たちは有能で物事に対して理解力があるおリコウさんなのだが、何とバカなのだろうと呆れることが多い。上記の言葉をより一般化しようとする「下劣」という表現はキツすぎるかもしれない。かれらは自信家で、強い我意我欲が前面に出てしまう人たちなのだ。アリョーシャには考えるまでもなく直ぐに見つかる答えが、リコウなイワンにはみえない。傲慢さがかれを盲目にしているようだ。

B. 他の小説：変わった人々とフツウの人々

1. 変わった人たち

ドストエフスキーの小説には変わった人がでてくる。『貧しい人々』のジェーヴシキンは自意識過剰というか、勝手に前もってアレコレ考えてしまい、いざ本番では身動きが取れず、滑らかに行動できないような人物だ。『二重人格』のゴリヤートキンは変わった人というのを通りこして二重身の病人そのものだ。ドストエフスキーはオムスクの要塞監獄で様々なトンデモナイ人々をみてきたので、かれらを小説の登場人物のモデルにすることは容易だっただろう。『死の家の記録』はあたかも犯罪者一覧といった印象がある。ペトロフ、オルロフのような強者、ガージンのような乱暴者、道徳心を全く欠如させた者A(これは『虐げられた人々』のワルコフスキーのモデルか)、陽気な犯罪者バクルーシン、妙に押し出しのいいクリコフ、何とも形容のしようがないユダヤ人のイサイ・フォミーチ(かれは『白痴』のレーベジェフのモデルか?)、囚人の間を漂うように生きているシロートキン、誰かに寄生しないと生きていけない弱者スシーロフ(『白痴』のスリコフのモデルか)、等々である。しかし、聖人の様な旧教徒の老人やコーカサスの回教徒の若者アレイ(アリョーシャのモデルと言われることがある。ゾシマ長老とアンフィーム神父が巡礼の途中に出会った青年のモデルだろう)など、宝石のような人にも出会っている。『地下室の手記』の主人公にいたっては、本文の冒頭で自分は病的な人間だ、意地悪な人間だ、人好きのしない人間だなどと言いたい放題言っている。

『罪と罰』のラスコーリニコフは「ナポレオン」になろうとして、一步踏み出した若者である(結局は持ちこたえることができなかったのだが)。ソーニャは貧困から娼婦へ身を落とした少女である。しかし、流刑されたラスコーリニコフについてシベリヤへ赴く聖女のような女でもある。その父マルメラードフは酒で自らを痛めつけ、どん底から神を仰ぎ見る人だ。スヴィドリガイロフは奥さんを殺したとうわさされており、ラスコーリニコフの妹に言いよるが、拒絶され自殺する。初対面のラスコーリニコフに奥さんの幽霊について語り、「永遠(あの世のことだろう)とは田舎の東屋の風呂場にかかっている蜘蛛の巣にいる蜘蛛だ」などとトンデモナイことをいう怪人である。『白痴』のムイシュキンも初対面の人たちにギロチンの話をするなど、KYぶりを発揮する。レーベジェフはもう何と表現してよいのか分らない奇妙で、一筋縄でいかない人物だ。イヴォルギン將軍は嘘しか話さない。ところが、嘘のつもりで話していたことが真実であると分かり、感涙にむせぶような老人である。ロゴジン、イポリート、『悪霊』のスタヴローギン、キリーロフ、シャートフ、ピョートル、シガリョフ、等などすべて変人、怪人、奇妙な人々であるが、もうよそう。何人かの人はいずれ触れることになるだろう。いずれにしても、ドストエフスキーの小説の魅力は変わり者同士がぶつかるところから生まれる。

2. フツーの人たち

無論、ドストエフスキーの小説にはフツーの人も登場する。ドストエフスキーは『白痴』の中で、「取り立てていうところのない」あるいは「有りふれた」凡庸な人間の分析をして

いる（「大審問官」流にいうと「神の失敗作」）。ドストエフスキーが問題にした一群の凡庸な人たちは、独創的で自分自身の思想をもつ「あるべき自分」像を持っている。これらの凡庸な人たちには二つのタイプがあり、一つは自己の才能のなさに全く無自覚な人たちであり、もう一つのタイプは自己の才能のなさに気がついている「それよりもずっと利口な」人たちである。前者は天真爛漫な傲慢さをもち、自己と自己の才能を信じて疑わない愚かな人たちである。これらの人たちは、例えば、たまたまみつけた本の一ページを読むだけで、それは自分の頭で考えだした自分自身の思想ということになる幸せな人たちである。一方、後者のタイプの「それよりもずっと利口な」人たちは、自分を天才と思いついても、心の片隅に自分には才能がないという自覚があるので、自らに絶望してしまう不幸な人たちである。「あるべき自分」を求める気持ちが強いときは、フツーの人であることを拒否するために、奇をてらうような行動さえする。これらの人たちは、それなりの財産があり、家柄もマアママ、容貌だって悪くないし、教育も一通り受けている。アタマも悪くないし、好ましい性格すらもっている。しかし、これらはすべて抜きん出ているほどではなく、才能が全然なく、大した感情ももたず、自分自身の思想をもっていない。これらの人たちは世の中の感覚では、功なり名を挙げており、将官、文学者、学者、活動家としてそれなりに活躍しているという。また、凡庸さを示す例として、「ロスチャイルド」になろうとしない、多くを望まない人たちがいる。これらの人たちの中にも世間的には成功した、しかし小ぶりの成功を勝ち得た人たちがいる。『白痴』のガーニャ・イヴォルギンは「ロスチャイルド」になろうとして、その一步を踏み出せなかった人物だ。ドストエフスキーは所謂実務家が嫌いなようで、臆病で、創意が欠如していれば、それなりの地位につけると述べている。地位につけないのは独創的な、言い換えると、物騒な連中だそうだ。

こうみえてくると、凡庸でない人は変わり者、才能があり、自分の思想を持っており、独創的、創意があり、何かの点で圧倒的に抜きん出ている人ということになる。家柄、財産、学歴、アタマの良し悪しなどは関係ない。そうすると、世の中の人の大部分、ほとんどすべての人が凡庸ということになるようである。一方、ドストエフスキーの主要な登場人物たちは皆変わり者である。さらに、ドストエフスキーはこの変わり者を際立たせる細工もしている。たとえば、『罪と罰』のルージンはソーニャを陥れようとする俗物の文字通り吝嗇な悪党だが、同じ悪党のスヴィドリガイロフを「怪人」の域に高めるのに役立っている（スヴィドリガイロフは自分の遺産をソーニャやその妹、弟に遺している）。『カラマゾフの兄弟』のラキーチンは知的に優れており、イワンをライバル視しているほどだが、その俗物ぶりをイワンに揶揄される。ドミートリイが内部に新しい人間が誕生したことを自覚し、地底で賛歌をうたう覚悟を語る時、その神聖さの引き立て役としてラキーチンが登場する。そして、かれはドミートリイからはブタ野郎！と罵倒されている。

II. 小説の道具立て

『カラマーゾフの兄弟』の話の筋は長男ドミートリイと父親フョードルのお金と女性をめぐる争いよりなっている。そしてフョードル親父は殺され、ドミートリイに嫌疑がかかる。ドミートリイは逮捕され、裁判で有罪の判決を受ける。しかし、ドミートリイは犯人でなく、冤罪だった。似たような境遇の男（イリインスキー）にドストエフスキーは『死の家』で出会っているので参考にしたのである。実際の下手人はスメルジャコフで、かれはイワンの「教唆」により父親殺しを実行したと思っている。イワンにはその点の明確な意識がなく、スメルジャコフに犯行を打ち明けられて衝撃を受け、「悪魔」に出会い、発狂する。ここでは『カラマーゾフの兄弟』を中心に、ドストエフスキーの小説にしばしば出てくる「道具立て」について述べる。なお、イワンの神への反逆とアリョーシャの神への信仰が小説の思想的背景となっているが、その点はこの小説の核心、ドストエフスキーが生涯悩んだ問題なので、別にIIIで述べる。

A. 殺人と自殺

ドストエフスキーの小説には犯罪それも殺人や、自殺、発狂がしばしば出てくる。『死の家』で犯罪者に囲まれていたので、小説の題材には事欠かなかったと思われる。『カラマーゾフの兄弟』のプロットは、上に述べたように、ドミートリイによる「父親殺し」であり、真犯人のスメルジャコフは自殺し、「共犯者」イワンは発狂する。『罪と罰』でラスコーリニコフは金貸しの老婆とたまたま来あわせた女性を殺害してしまう。また、スヴィドリガイロフは悪夢をみた後で拳銃自殺をする。『白痴』でロゴージンはムイシュキン公爵を殺害しようとし（これは未遂に終わった）、ナスターシャ・フィリポヴナを殺してしまう。そして、ムイシュキン公爵はもとの「白痴」に戻る。イボリートは「弁明」を読み上げた後拳銃自殺を試みるが、雷管を入れ忘れて失敗するという、悲劇とも喜劇ともつかないドタバタ劇を演じる。『悪霊』でピョートルは革命のため、スタヴローギンの妻マリヤやその兄レビヤートキン、さらにシャートフを殺害し、キリーロフの自殺を利用する。そして少女マトリョーシャを自殺に追いやったスタヴローギンも自殺する。前にふれたが、ドストエフスキーはオムスクの要塞監獄で犯罪者に囲まれて4年間を過ごした。それは『死の家の記録』に述べられているが、多くの犯罪者、犯罪を知り、また、考えることになっただろう。

B. 「父親殺し」

ドストエフスキーの家系は500年以上さかのぼれるそうだ。立派な人もいたようだが、犯罪者（殺人者）も結構いる。善と悪が幅広く共存しており、ドストエフスキー本人やかれの作品を予想させる。さて、父親殺しに戻ろう。『カラマーゾフの兄弟』では発狂したイ

ワンが「父親の死を望まない奴はいない」と叫ぶ。この台詞にはドストエフスキーと父親ミハイル・アンドレーヴィッチの関係が反映されているという。その真偽は不明だが、どんな父親だったのだろう。グロスマンやトロワイヤのドストエフスキーの伝記によると、神学校に通い司祭になるはずだったミハイルは方向転換し、医学校へ通い軍医になった。最終的にはモスクワの慈善病院の医師になったが、その別棟でドストエフスキー一家は暮らしていた。父ミハイルは他人に厳しく、ガミガミとうるさく、怒りやすく、傲慢で、猜疑心が強く、極端なまでに吝嗇な暴君だったようだ。ドストエフスキーは父親のことを語りたがらなかったというから、父親によい感情は持っていなかっただろう。それが上記のイワンの台詞になったのかもしれない。そこにフロイト的な父親と息子の関係があるのだろうか。母親に対する感情はアリョーシャが、父親へのそれはイワンが体現すると考えるのは、あまりにも図式的すぎるか。その点はもっと調べないと分からないが、フロイトを持ち出すまでもない印象だ。ドストエフスキーは父親に反発するかのようになり浪費家になるが、猜疑心が強いなど、父親から受け継いだ側面も濃厚にあるように思われる。父ミハイルは極端な性格が災いしたか、不幸な死に方をしている。領地の百姓に殺されたのだ。この事実は小説に影響したかもしれないが、過大に評価するのはどうだろうか。むしろ、『死の家』で経験した冤罪だった男イリンスキーの方が重要だろう。その男のデタラメさ、放蕩ぶりなどはそのままドミートリイの一面に引き継がれている。なお、父と子は『悪霊』、『未成年』のテーマである。

C. 裁判と刑罰

ドストエフスキーは新聞の社会面を隅々まで読む人だったようだ。犯罪に興味を持っていた。主要な小説、『罪と罰』、『白痴』、『悪霊』、『カラマーゾフの兄弟』はすべて犯罪が絡んでいる。恐らく、『死の家』で経験し、考えたことを反芻、再確認することになっただろう。作家の興味は『カラマーゾフの兄弟』のイワンが「反逆」で次から次へと語る小児虐待の事例の材料を提供しただろう。ドストエフスキー自身、若い頃革命運動に参加し逮捕されている。その際、検事に尋問で追求された。ドストエフスキーはうまくのがれて口を割らなかったようだが、その経験は『罪と罰』のラスコーリニコフと予審判事ポリフィエリイの息詰まるやりとり生かされているだろう。ドストエフスキーはしばしば裁判を傍聴したという。それは『カラマーゾフの兄弟』の弁護士、検事、陪審員、傍聴者の言動に生かされているだろう。

ところで、ドストエフスキーは『死の家』で自分が悪いと思っている囚人に出会うことはなかった。それは刑罰に対する疑問になったし、『カラマーゾフの兄弟』の「場違いな会合」における国家と教会の議論になったと思われる。また、あからさまに悔い改めるラスコーリニコフなど考えることはできなかつただろう。

D. 革命

すでに述べたように、ドストエフスキーは革命運動に参加している。それも過激なグループの一員だったようだ。逮捕され、最終的には4年間の『死の家』での生活と6年間の兵役が待っていた。その間、聖書の熟読などで革命思想を捨てたと思われるが、それほど単純ではないようだ。神の問題はドストエフスキーの最大のテーマであり、神と不信の間で生涯思索を重ねていた。かれにとって革命の問題は無神論の問題でもある以上、簡単に否定できなかったはずである。『悪霊』は実際に起こったネチャアエフの事件を下敷きにしているが、ドストエフスキーは自らを「老いたるネチャアエフィアン」と述べていることから、それはうかがえる。

ドストエフスキーの小説にはしばしば活動家が出てくる。『白痴』ではレーベジェフの甥やブルドフスキー（パヴリーシチェフの「息子」）などの若者たちは活動家の系統のようだ。すでに述べたように『悪霊』は革命運動の内部を描いたものである。活動家たちの会議の描写などに、ドストエフスキーの経験が生かされているだろう。シガリョフ（そして、ピョートル）が語る革命運動の結果としての未来の社会は以下のようなものである。すなわち、無制限の自由から出発して、無制限の専制主義に到達する。人類を十分の一と、十分の九に分ける。前者は個人の自由と十分の九への無制限の権利を獲得する。十分の九は人格を失い、意志を失い、家畜の群れのようなものになり、何代かの退化の後に原始の楽園で暮らすことになる。スパイ制度により、社会の全構成員が相互に監視して、密告の義務を負う。専制主義なしにはこれまで自由も平等もあつたためしがないのだ。ただし、全員が奴隷であり、平等だ。家畜は平等でなければならない。高度の能力を持った者は追放されるか、処刑される。これは後に述べる「大審問官」が語る社会とよく似ている。

『未成年』にも活動家が出てくる。ただし、『白痴』、『悪霊』ほどは活動家に辛辣ではない。『未成年』は長らく対立してきた陣営のネクラソフ（しかし、仲は悪くなかった）の依頼による小説だからかもしれない。その中で主人公の「父」であるヴェルシーロフは言う。この体制はいずれ無産階級によってとって代わられるだろう。しかし、その体制もいずれ別のものによって代わられるだろう、と。

これらのドストエフスキーの「予言」が的中したことをわれわれは知っている。かれの分析と思索は21世紀になった今でも有効である。ドストエフスキーが「最年長の同時代人」（中村健之介『永遠のドストエフスキー』中公新書）と呼ばれる所以である。

E. 金銭

『カラマーゾフの兄弟』はお金と一人の女性グルーシェニカをめぐるフォードル親父とドミートリイの争いが中心になっている。ドミートリイはフォードル親父が自分の受け取るべき金をごまかしていると思ひ反発を強めている。父親は父親で金にだらしない息子

をいいカモだと思っていたようだ。ドミートリイはかれの婚約者であるもう一人の女性カテリーナとの間にもお金の問題がある。カテリーナの父親の中佐が騙されて大金を失い困っている時、ドミートリイが用立ててやった。ただし、カテリーナが一人で自分のところに金を取りに来るように要求する。ドミートリイはヨカラヌことを考えていたが、実際は何もせず金を渡した。これがきっかけでドミートリイとカテリーナは婚約することになる。ある時、カテリーナはドミートリイにかの女の姉に三千ルーブル送ることを依頼する。しかし、ドミートリイはその金を送らず、一目でノック・アウトされたグルーシェニカに金を使ってしまう。ドミートリイは返却のために金策に奔走し様々な喜劇を演じる。フォードル親父は親父で三千ルーブルをグルーシェニカが来たらプレゼントしようと待ち焦がれている。ドミートリイが金に困っていたことが、父親殺しの動機になるとみなされてしまう。

ドストエフスキーの小説には金銭、お金のことがしばしば出てくる。『貧しい人々』には金銭の話が頻繁に出てくる。『死の家の記録』で囚人と金の関係がしばしば出てくる。囚人とは自由意思のない人間のことだが、金により自分の意思で行動する。監獄にあっては、「自由」は金で買えるものだった。『罪と罰』でラスコーリニコフは崇高な目的のために、(虱の様な) 金貸しの老婆の命と金を奪った。『賭博者』はドストエフスキー自身が溺れた賭博を扱った小説である。『白痴』ではロゴージンが札束を積んでナスターシャ・フィリップポヴァを得ようとしている。かの女はその札束を暖炉に放り込み、ガーニャ・イヴォルギンに与えるが、「ロスチャイルド」を目指すガーニャは自尊心からそれを拾い出すことができず、フツーの人になる。ムイシュキン公爵は遺産を手にするが、活動家の若者たちが、それを横取りしようとする。

ドストエフスキーは計画的に金銭を使うことなどしなかったし、できなかった。かれの原稿料は同時代の裕福な作家トルストイ、ツルゲーネフよりも低く、雑誌の失敗なども重なり、常に借金に悩まされていた。アンナ夫人との4年にわたるヨーロッパ滞在は借金取りから逃れる様に行われた。その旅行中、ドストエフスキーの常軌を逸した賭博熱が窮乏に輪をかけた。ドストエフスキーが借金を完済し、多少余裕ができたのは晩年になってからだ。それはすべてアンナ夫人の実務能力のおかげであった。

F. 恋愛

ドストエフスキーの小説にはマトモな恋愛はない。『貧しい人々』のジェーヴシキンとワルワーラは恋愛とも言えないような関係であり、最後にワルワーラはジェーヴシキンから去ってしまう。『白夜』も実らなかった恋の物語だ。ドストエフスキーのシベリヤでの恋愛を反映している『虐げられた人々』で、主人公のナターシャへの愛は一方通行だ。『罪と罰』のラスコーリニコフとソーニャの関係は恋愛というには深刻すぎる。ドストエフスキーがペテルブルグへ戻ってからのアポリナーリヤ・スースロワとの恋愛が反映されている『賭

博者』で、主人公はポーリナに翻弄されている。『白痴』のムイシュキン公爵とナスターシャ、ロゴジンとナスターシャの関係、公爵とアグラヤとの関係もラブ・ロマンスなどからは程遠い。『悪霊』のスタヴローギンのレビヤートキナとの結婚もリーザとの恋愛も退屈を紛らわせるためのものだ。『カラマゾフの兄弟』のドミートリイとカテリーナは婚約者だが関係は壊れており、ドミートリイはグルーシェニカに参っている（フォードル親父もかの女にぞっこんである）。カテリーナはカテリーナでイワンと恋仲である。カテリーナとドミートリイ、カテリーナとイワンの関係が裁判で決定的な影響を与える。おまけに、アリョーシャの恋人？のリーザもイワンに色目を使うありさまだ。やはりヘンな恋愛ばかりである。

G. 意識と無意識

『カラマゾフの兄弟』で、イワンはアリョーシャと「都」で語り合う。神へ反抗し「大審問官」を語る自分と、キリストを信じるアリョーシャでは、基本的なところで折り合う余地はないことをイワンは認識する。その直後にイワンは「無意識」のうちにスメルジャコフに父親殺しのゴーサインを出してしまう。このくだりはフロイトの無意識を連想させるので、少し詳しく読んでみる。

アリョーシャと別れたイワンは父親の家に帰るが、原因が分からない憂鬱な気分が襲われる。しかし、家に帰った時涼んでいるスメルジャコフを見た瞬間に憂鬱の原因を理解する。イワンはかれを無視しようとするが、自分でも驚いたことに、スメルジャコフに声をかけてしまう。スメルジャコフはフォードル親父を殺害する計画を持ち、イワンに承認を求めていた。イワンは無意識のレベルでは同じ希望を持っていたが、意識的にはそのような考えを否定していた。意識と無意識が交差するこの部分はドストエフスキーの独壇場のように思われる。スメルジャコフは殺人に邪魔なイワンを家から遠ざけ、かつイワンのためにアリバイを用意したつもりでいる。計画が成就した暁には一生イワンにたかるつもりだった。イワンは自分でもなぜかわからないままに翌朝モスクワへ発つことをスメルジャコフに伝えた。スメルジャコフはこれを父親殺しについてのイワンのゴーサインと解釈した。

イワンは発つ前の夜、階下の父親の動静を探るかのようになど度か階段の上にてた。何かが起こることを期待するかのようにな。かれは終生この行為を醜悪で卑劣だと考えていた。イワンは汽車の中で闇が心を閉ざし、悲しみがうずき始める。汽車がモスクワに入るところ自分は卑劣な人間だとひそかにつぶやいた。しかし、なぜ醜悪で卑劣なのか、イワンには分らなかっただろう。このようなイワンの無意識は後にスメルジャコフによって暴かれ、「悪魔。イワンの悪夢」で徹底的に嘲笑されることになる。

フロイトは神経症の観察や治療などから無意識の存在に気がついた。ドストエフスキーが無意識を発見するには、かれのテンカンの経験が重要だったかもしれない。

H. テンカン

よく知られているように、ドストエフスキーにはテンカンの持病があった。小説家の体験が最も明確に語られているのは『白痴』の主人公ムイシュキン公爵においてである。ドストエフスキーがテンカンの発作で経験したことは公爵の口から語られる。それをみていこう。ペテルブルグから戻った公爵はレーベジェフと会うが、その中でテンカンに関係すると思われる記述が三ヶ所ある。公爵が会話の途中でぼんやりすること、公爵自身の気分がすぐれないという発言、公爵の挨拶なしの唐突な辞去である。公爵の発言は別として、残りの二つは小さなテンカンの発作のように思われる。その後、ロゴージンの家でかれと公爵の深刻なやりとりがあるが、その中でも公爵は気分がすぐれず、テンカン発作の予感を語る。公爵は再びぼんやりとしてナイフをもてあそぶ。この行動は興味深い、それについてはここではふれない。

ロゴージンの家を後にした公爵は発作を予感しながら街をさ迷うように歩いたが、ベンチで休んでいる時にテンカンの大発作の直前の一瞬の経験について考えている。それは生きているという感覚や自意識が増大し、知恵と感情が照らし出され、憤激、疑惑、不安は鎮まり、調和に満ちた歓喜と希望にあふれる神聖な境地に解放されるもののようである（新潮社版の木村訳を適当に要約している）。それは「至高の实在」であり、「美であり祈りであり」、「至高なる生の総合」であり、「この一瞬のためなら全生涯を投げ出してもいい、時を超越する至高の一瞬」だという。テンカンを患うものの中にこのような経験をもつものがまれにいるようである。ドストエフスキーはそのまれな一例らしい。しかし、この一瞬の経験の後には大発作に特有な表情や発声があり、それらを見聞きするものに、ロゴージンも含め、恐怖を感じさせる。そして、発作に続く精神の麻痺、精神的暗黒、白痴感に悩まされることになる。

この経験は『悪霊』のキリーロフによっても語られる。この経験はかれの人神論の中で「あの世」に代わるものと考えられた永遠の刹那である。しかし、シャートフは適切にテンカン疑っている（『罪と罰』でもラスコーリニコフが警察で失神する場面がある）。『カラマゾフの兄弟』ではスメルジャコフがテンカンの持病を持っていた。スメルジャコフのテンカンを説明するに際して、ドストエフスキーはクラムスコイという画家の絵『瞑想する人』を引き合いに出している。小さな発作が起こった時、その人は発作の間にいだいていた印象を心の内に秘める。その印象は貴重なもので、無意識のうちにそれを貯える。そしてある時、突飛のない行動にでる、と。当然、そこには作家の経験、自己分析が反映されているだろう。『白痴』、『悪霊』で重要な意味を賦与されていたテンカンであるが、『カラマゾフの兄弟』では父親殺しに利用されることになった。この変化はドストエフスキーの信仰についての考えの進展を反映しているように思われる。『白痴』では「キリスト公爵」といわれるムイシュキンだが、病身で十分に力強い信仰を持っているようには見えない。ムイシュキン公爵がイポリートと共有する一面は『悪霊』のキリーロフの人神論とな

り、イワン・カラマゾフに受け継がれる。一方、公爵の別の一面は『悪霊』のシャートフ、そしてアリョーシャにひきつがれるが、アリョーシャは健康そのもので、バラ色の頬を持つ青年である。病的な面はない。

I. 夢と幻覚

ドストエフスキーの小説では大切なところで夢が出てくる。『カラマゾフの兄弟』ではドミートリイを蘇生させ、地底で賛歌を歌う決心をさせた焼け出された人々の夢、イワンの悪魔と議論する悪夢、幻覚、アリョーシャのゾシマ長老の復活の夢などである。これらの夢は三人の兄弟のそれぞれにとって最も重要なエピソードなので、Ⅲ.「信仰と不信」のところで詳しく述べる。『罪と罰』のラスコーリニコフの殺害した老婆が笑う夢、鞭打たれる馬の夢、スヴィドリガイロフの奥さんについての幻覚や若い娼婦の夢、『白痴』のイポリートに「弁明」を書かせる契機となったロゴージンについての幻覚や夢、スタヴローギンの「楽園」を破ったゼラニウムとクモの夢などである。

少し脱線して、夢に出てきた今は亡き友を、生きている！と思うのは何故か？について考えてみた。日常経験から考えて、自分が生み出したと思っていない視覚イメージに対して人はその実在を信じる。われわれは生まれてこの方、そういう風に生きてきた。そうしないと、外部世界は成り立たず、生きていけない。一方、夢は現在の自分の経験であるという所有感、帰属感はある。夢は自分がみているという感覚。すなわち、**authorship** はないが、**ownership** はある。したがって、今、自分の眼前にいるのは生きている友であるという認識をもつ。友人であることが分かるからには、友人に関する記憶も呼び覚まされている。この呼び覚まされた記憶は、友人の視覚イメージとそれに貼られた名前という簡単なものから、友についての様々な記憶、たとえば仲が良かったとか、時にはケンカをしたとか、同じ職場だったといった、もろもろの複雑な経験までである。そして、友は亡くなってもういないことも夢をみつつ思い出されるだろう。友が目の前にいる、しかし友はすでに亡くなっている。それが生きている！という反応になるのではないだろうか。

J. 理性と情熱

「理性なんてものは情熱の奴隷ですからな。」これはスヴィドリガイロフが初対面のラスコーリニコフに言った言葉だ。「情熱」という言葉をもう少し一般化して「感情・欲望」に置き換える。理性と感情・欲望の間には正反対の二つの関係がある。一つは理性が感情・欲望をコントロールすること。われわれが感情や欲望のおもむくままに行動していたら、社会では生きていけない。もう一つは感情・欲望が理性を方向づけること。上の言葉は後者について述べたものだろう。このホームページの『脳と心：認知神経科学入門』の第5章はそのような立場から書いた。

従来、理性と感情・情動が対立し（ドストエフスキーに関してそのような立場からの論説があるようだ）、前者が後者を抑制するという面が強調され気味だった。しかし、理性的な意思決定には必ず感情・情動の裏打ちがあり、感情・情動が理性的な意思決定を意識なしに導くこともある、とも考えられる。理性と感情・情動を双方向的にとらえ、後者の位置を従来よりも持ち上げ、積極的な面を強調したということか。日常生活でも、希望、願望、欲望を実現するために、論理が使われることが多いことに気づく。『未成年』で主人公アルカジイは理由が分からないまま、高まる心臓の鼓動を感じている（このような自律神経系の反応は情動の重要な要素である）。情動・感情が理性に先行している。フロイトそして、最近のダマシオらの脳科学の成果を知ってもドストエフスキーは全く驚かず、「何を今更」と思うことだろう。

K. 子供

ドストエフスキーの小説には子供がたびたび登場する。そして、作家本人、かれの小説の主人公のあるものは、子供好きだ。『カラマゾフの兄弟』でイワンは言う。残酷な人間、情熱的で淫蕩なカラマゾフ型の人間は子供が好きだ、と。イワンが神に反逆する根拠は子供たちの苦しみ、幼児虐待だった。イリュエシヤ、ニコライ（コーリヤ）・クラソートキン、カルタショフ、スムーロフなど、多くの子供がアリョーシヤの周囲に集まる。『白痴』のムイシュキン公爵とマリイをめぐるスイスの子供たちの話も心に残る。この二つの小説は宗教が絡むところなど似たところがある。『白痴』では子供たちのことは過去の挿話だったが、『カラマゾフの兄弟』の子供たちは将来続編で重要な役割を演じることになっていたい。他に『虐げられた人々』のネルリ、『罪と罰』のソーニヤの弟や妹たち、スヴィドリガイロフの夢に現われた幼い娼婦がいる。『悪霊』ではスタヴローギンが幼いマトリョーシヤを死に追いやり、自死するのをゼラニウムを眺めつつ待っていた。アリョーシヤ、ムイシュキンはスヴィドリガイロフ、スタヴローギンの対極にいるが、子供との関係も対極的だ。

L. 動物

アリョーシヤのところで問題にした幼児信号はエソロジーのテーマだが、それに関連して、ドストエフスキーは動物好き（特にイヌ）だという印象だ。『虐げられた人々』のネルリのお祖父さんにはアズルカというイヌが寄り添っていたし、『作家の日記』の『百姓マレイ』に出てくる子供は幼いドストエフスキーだろうが、ヴォルチョークという名のイヌを飼っていたことが分かる。尊い思い出に出てくるのだから、イヌは心の友達だったと思われる。この話は『死の家』で回想されたが、その『記録』にはしばしば動物が出てくる。イヌがドストエフスキーのつらい監獄生活を慰めてくれたことが分かる。さらに、監獄の

動物のためにわざわざ一章設けている。登場する動物たちは生き生きと描かれ、記述は正確だ。

ドストエフスキーは単純な動物好きではない。かれの小説には鞭打たれるウマの話がしばしば出てくる。『作家の日記』にロシアの動物愛護協会 10 周年に関連して書いた文があるが、動物を優しく扱えば、それは他人に接する態度に波及し、子どもの教育にも好ましいという意味のことが書かれていたと記憶する。その逆を行ったのが「父親」殺しのスメルジャコフで、子供の頃から動物虐待をしていた。動物への態度は重要な意味を持つというドストエフスキーの指摘だが、神戸連続児童殺傷事件などわが国で起った奇怪な事件にも当てはまるように思う。

『カラマーゾフの兄弟』の中で、少年コーリャとイヌの話が出てくる。かれは仲間のスムーロフがイヌの習性を滑稽だと言ったのに対し、イヌから見たらヒトの社会的な行動は滑稽に見えるだろう、と反論している。こんなところにもポリフォニーが顔をだす。サルは恐ろしい時に歯をむき出した表情をする。ヒトでそれに近いのは笑いの表情だ。サルたちはヒトを観察しながら、何故アイツ等はお互いに怖がりながらベタベタしているのだろう、と不思議に思っているかも知れない。

ところで話は脱線するが、なぜスムーロフは、亡くなったイリュージャが自分の墓に来てほしいと願っていたスズメ達に、煉瓦の破片を投げつけたりしたのだろうか。動物をいじめるのは好ましい行為ではないはずだ。この話は唐突に出てきて、奇妙な感じがした（続編への布石なのだろうか？）。時折、草花が傷つけられ、動物が虐待されることがニュースになる。なんとも嫌で不安、不吉な気分になる。

また、ドストエフスキーはクモが嫌いなようだ。『死の家の記録』では、言いがかりをつけ、ドストエフスキーを窮地に追い込んだ乱暴者・ガージンに巨大で醜悪なクモのようだと表現されている。『罪と罰』で怪人・スヴィドリガイロフは、「永遠」とは田舎の風呂場にかかっているクモの巣のクモだなどと、トンデモナイことを言っている（それにしても、よくマアこんなことを思いつくなど、ヘンに感心してしまう）。『白痴』ではイポリートが、ロゴージンの家でみたホルバインの絵の印象から、キリストをも飲み込んでしまう、無意味で無慈悲な「自然の法則」をやはり巨大で醜悪なクモにたとえている。『悪霊』ではスタヴローギンが、ゼラニウムの葉にいるクモによって、クロード・ロランの絵による幸せで尊い「黄金時代」の夢を破られている。ゼラニウムの葉は、かれが少女マトリョーシャの縊死を待っているときに見つめていたものだった。そして、スヴィドリガイロフ、イポリート、スタヴローギンは自殺をした（哀れなイポリートは未遂ですが）。こうしてみると、ドストエフスキーにとってクモはキリストやロシア正教に対立する、恐ろしい、不気味で不快なものの象徴のようだ。

M. 二種類の自然

ドストエフスキーを読むー『カラマーゾフの兄弟』を中心にー
小嶋 祥三

ドストエフスキーの小説には二つの自然がでてくる。一つは神の恩寵に満ちた自然であり、もう一方はキリストをも無残に飲み込んでしまう無慈悲な自然である。一方は神、信仰、不死、永遠の生に関連し、他方は無神論、死、無に関係する。ドストエフスキーにとって、科学は後者の自然の法則の発見を目指すものであり、神、信仰に対立するもののようなのである。精神、心を科学的に研究することを提唱したクロード・ベルナールに対して、『カラマーゾフの兄弟』のドミートリイは口をきわめて罵倒している。この問題は、次のⅢ.「信仰と不信」のテーマである。

Ⅲ. 信仰と不信

『カラマーゾフの兄弟の』の思想的な背景は信仰の問題、神の問題である。それはすでに述べたようにイワン「大審問官」とアリョーシャー「ゾシマ長老の談話記録」の対立として表現されている。この問題をドストエフスキーが生涯にわたって考え、悩んだ。それは『死の家の記録』から始まると考えられるが、とくに『白痴』のムイシュキン公爵とイポリート青年、『悪霊』のキリーロフは信仰の観点から重要な人物である。この二つの小説から始めよう。

A. 『白痴』ームイシュキン公爵とイポリート

ドストエフスキー夫妻は祖国ロシアから逃げるようにしてヨーロッパに向かった。この放浪の旅は結局4年も続いた。この間、『白痴』や『悪霊』などの傑作を書いた。『白痴』はドストエフスキーの自伝的な要素が濃厚で、かれの刑場における死に関する感触や考えが述べられている。この小説はテンカンの治療を終えたムイシュキン公爵が、スイスからロシアに帰国する列車の中でロゴージンと一緒になるところから物語が始まっている。公爵は遠縁のエパンチン夫人を訪ねる予定だった。この小説は一人の女性（ナスターシャ・フィリポヴナ）をめぐるムイシュキン公爵とロゴージンの物語であるが、エパンチン家の三女アグラヤも絡んでくる。生と死という観点からはイポリート・チェレンチェフという青年の「弁明」が重要である。

エパンチン家についての公爵は召使と会話をする。ヨーロッパとロシアの裁判の話題から、当時ロシアでは行われていない死刑の話になる。公爵は見物したギロチンの話をするが、それは苦痛が少ないという召使の言葉に公爵は異なる考えを示す。それは殺人よりも死刑の方がずっと残酷だという意見。事件で殺される者は身体的な苦痛を恐れ苦しむが、生存への一縷の望みを持ちえる。ところが、死刑宣告をされたものは、逃げることはかなわずもっと恐ろしい精神的な苦痛に苦しむ、と。そしてドストエフスキーの死刑判決、刑場での恩赦の経験が批判的に語られる。召使は公爵にある種の感銘を受けたようだ。

ドストエフスキーが死と向き合ったのは、刑場においてであった。かれは革命思想家ペトラシェフスキーの会で活動したのが理由で死刑の判決を受けた（かれはもっと過激な小グループにも参加していたようだが）。しかし、死刑執行の直前に皇帝による仕組まれた特赦があり、懲役4年と兵卒勤務に減刑され、シベリヤへ送られた。無論、そのようなことになるとは知らされていないドストエフスキーは銃殺されると信じていた。刑場で死を前にした時の経験は『白痴』のムイシュキン公爵の口から、知人の話としてエパンチン家の人々に語られている。ドストエフスキーが死刑直前の最後の5分間にしたこと。友人との別れに2分、自分のことを考えるのに2分、残りの時間はこの世の名残に周りの風景を眺めた。友

人とはとるに足らぬ話をしたという。これは「死」から眼をそらそうとしたためだろうか。自分のことを考えた時には、死ぬとはどういうことかと考えた。教会の金色の屋根に反射する光が「自然」であり、それと融合することが死なのだと考えた。そして、もし命が助かったなら…。この苦しい想念は憤懣に変わり、一刻も早く銃殺して欲しいと思うまでになった。確かに耐えがたいことだったろう。

もう一つ重要なのはハンス・ホルバイン・ジュニアの絵だ。ドストエフスキー夫妻が放浪中のバーゼルでみたホルバインの十字架から降ろされたキリストの絵である。アンナ夫人の『日記』によると、かれはこの絵に魅了され、わざわざ椅子に乗って眺めたという（この記述は後に書かれた夫人の『回想』と異なっている。速記で書かれた日記は脚色がなく、事実に近いのではないだろうか）。それにしてもドストエフスキーは、信仰心を失いかねず、キリストをも飲み込んでしまう無慈悲な自然を連想させるこの絵のどこに魅了されたのだろうか。『白痴』の中でこの絵は少なくとも3回話題になる。初めはエパンチン家の次女アデライーダの画題について話している時にチラッとでてくるが、アデライーダに遮られてギロチンの話になる。2回目はロゴージンの家を尋ねた公爵がこの絵の模写を見つけて信仰の話になる。3回目はイポリートの「弁明」の中で信仰への疑問、無慈悲な自然の話題となる。

公爵はロゴージンに神を信じるかと問われ、4つのエピソードを語る。C（多分、チェルヌイシェフスキー？）との車中の会話、神に祈って強盗殺人を犯す男、錫の十字架を銀と偽って公爵に売りつけ酒代を稼ぐ兵隊、赤ん坊が初めてみせる微笑に十字を切る母親。この母親の話はゾシマ長老が語ってもおかしくない。この母親の信仰を公爵は肯定し、そこにロシア人にとっての宗教の本質があると考え、ロゴージンの問いに真正面から答えてはいない。公爵は神の自然からは切り離されていると感じており、そして、イポリートの「弁明」で、公爵は自らを唯物論者と述べたとすら紹介されている。いずれにせよ、『カラマゾフの兄弟』にある堂々とした信仰を公爵の中に認めることはできない。

イポリートもこの絵をロゴージンの家でみた「弁明」の中で述べている。かれはキリストすら従わなければならなかった自然の法則をその中に見出す。この絵をみた者は信仰を失うのではないかと。かれは神の問題は理解を超えているので、理解できないものに責任はないと自殺するが、どんでん返しがあり、哀れにも未遂に終わる。イポリートがそれから疎外されていると感じた神が創造した自然とキリストをも呑み込んでしまう自然。信仰と不信。大雑把に、イポリートの考えは『悪霊』のキリーロフの人神に成長し、公爵の考えはシャートフに受け継がれる。

公爵はテンカンの治療のため滞在したスイスで孤独、憂愁に苦しんでいた。その内容ははっきりしないが、ペテルブルグへ戻ってきたその日に初対面のエパンチン將軍家の召使や夫人、令嬢たちに話すのがギロチンによる死刑についてであることから、死や生、すなわち自分の存在についてであったと思われる。イポリートは余命数週間と宣告された肺病やみの青年である。かれはロゴージンの幻影を見て自殺を決意し、「弁明」を読み上げる。

この世に生を享けたものの18歳（？、多分）で去らねばならない若者の怒り、苦しみ、悲しみに満ちている。そして、永遠に繰り返される自然の饗宴から切り離された疎外感、孤独。「弁明」の中に公爵は、自分がスイスで感じていた苦しみや悲しみ、涙が言葉になっているのを見出し、心を動かされる。

この疎外感は社会的なものではない。自然、神の恩寵に満ちた自然からの疎外、すなわち、信仰、宗教の問題である。イポリートがいう無慈悲な自然は『地下室の手記』の男の「ににんがし」に通じる。イポリートの自然の対極にあるのが、『カラマーゾフの兄弟』のゾシマ長老の兄マルケルが賛美する自然、ゾシマ長老やアンフィーム神父の神の恩寵に満ちた自然である。ドストエフスキーが刑場で、死とは光に融合することだと感じた自然はどちらの自然だろうか。ホルバインの絵はイポリートの自然を表現したものだ。少なくとも、そのように感じられる絵だ。ドストエフスキーはこの絵に魅せられた。ムイシュキン公爵の（そして当時のドストエフスキーの）信仰はどういうものだったのだろうか。

オムスクの要塞監獄における刑期を終えた後、ドストエフスキーはフォン・ヴィジン夫人あての手紙の中で、たとえキリストが真理の外にあるとしても、真理よりもキリストをとる、と述べている。これは方向が反対だがイワンの選択と対をなす。一方、ドストエフスキーは自分の信仰が溶鉱炉を潜ってきたとも述べている。ムイシュキンはアリョーシヤ・カラマーゾフの様な強固な信仰を持っているようにはみえない。かれは信仰と不信に引き裂かれているようだ。公爵が持つ信仰の側面を表しているのは、スイスにおけるマリイと子供たちとの挿話、ロゴージンに信仰について話したこと、イポリートをマイエル家の壁から引きはがし、パブロフスクの緑の木立に囲まれた公爵の家に引き取ったことなどである。一方、不信の側面は、神がつくった自然から疎外されているという感覚、ギロチンによる死刑やホルバインの絵に対する強い興味、イポリートにどのように死ぬのがいいかと問われて、「どうか私たちのそばを素通りして、私たちの幸福をゆるしてください！」としか答えられなかったことなどである。

ドストエフスキーが刑場で融合しようとした光はどちらの自然のものだろうか。あからさまに信仰については述べられていない。イポリートですら、昇ってくる太陽のもとで自殺しようとした。少なくとも『罪と罰』のスヴィドリガイロフのように「永遠とは田舎の東屋の風呂場の蜘蛛の巣にいる蜘蛛だ」などという考えとは遠く離れている。しかし、キリストもあの世も永遠の生もでてこない。少なくとも、ムイシュキン公爵にはアリョーシヤのような確固とした信仰はみられない。まだ、ドストエフスキーの信仰は溶鉱炉の中でドロドロとした状態だったのだろう。

B. 『悪霊』ーキリーロフ

キリーロフは成長したイポリートで人神論を語る。かれの考えを批判的に捉えてみる。

キリーロフによると、自殺を思いとどまらせる要因が二つあるという。それは「痛み」と「あの世」である。「痛み」について、キリーロフは頭上から落下する巨大な石を例にとり、その下で押し潰される者は痛みを感じる暇はないが、痛みを考えることによる苦痛はあるだろうという。石に痛みはないが、その恐怖には痛みがある、と。石を死に置き換えてみると、死には痛みはないが、死の恐怖には痛みがある、ということになるか。神は死の恐怖の痛みである、と結論されているが、文字通り理解しようとするとき分りにくい。神はいないが神はいる？という譬えの表現なのだろうか。

「あの世」については、生きていても生きていなくても同じである自由な状態を考えているようだ。これはキリスト教徒があので永遠の生を得た状態に似ているように思う。しかし、キリーロフには神はいないだろうし、キリスト教が説くあの世とは違うものと考えざるを得ないだろう。これはかれとスタヴローギン、シャートフとの会話に出てくる「永遠の刹那」に関係すると思われる。この自由な状態には、苦痛と恐怖に打ち勝つことができる新しい人間のみが達することができる。それが神（人神）であり、神はいなくなるという。人神には肉体的な変化も生じるらしい。

キリーロフは以下の4人の登場人物に自らの思想を語っている。語り手の私、スタヴローギン、シャートフ、ピョートルである（他にもいたかもしれない）。一応この順番で述べていく。キリーロフが語り手に話したところによると、生は恐怖と苦痛に満ちており、人間が生を愛するのは苦痛や恐怖を愛するからだ。生が苦痛や恐怖を代償に与えられている。これが欺瞞のもとだ。苦痛や恐怖に打ちかつ新しい人間、人神が現われる、と。確かに、生には苦痛や恐怖はつきものだ。『地下室』の男が言うように、歯痛にも快樂があるかもしれない。しかし、マゾヒストが実際にいて、だれもが強さは様々だろうがマゾヒスティックな傾向を持っていることを認めても、虫歯なんかないほうが好ましいのではないか。痛みを避けるのは生の原則に従うことだ。それを生の原則と相容れない自殺に際して考慮に入れる。これは何故だろう。死によってわれわれの精神も身体も消滅するだろう。死の痛み、恐怖、苦痛は（生の喜びも含め、一切合財が）消えてなくなる。死後には生存中の意識も記憶も何にも残らないだろう。どのような死に方をしても結果は同じである。それなのになぜ痛みを気にするのか。単純に、生物として自然な生への執着のあらわれと解釈するのが率直のように思われる。そう思うと、自殺者は哀れでもある。人神にはそのような同情は不要であるとキリーロフは言う。苦痛や恐怖を克服し、自然の原則に打ち勝つのが人神だ、と。ところで、誰にも生の喜びはあるだろう。そちらには目を瞑り、負の面しか見ないのはどういうことだろう。確かに、自殺をする多くの人は強烈な苦痛を経験しているだろう。その人たちに基づいて思想を組み立てられてもなかなか首肯できない。極端な事例がもの本質をあらわすことはあるだろうが、常にそうとは限らない。

次にスタヴローギン、シャートフと別々になされた会話から。この二人との会話に共通して含まれているのは「永遠の刹那」であるので、これは後に回すことにする。キリーロフはあるときから心境の変化があり、自分はいい人間で、幸福であり、すべてを肯定する

ようになったという。したがって、苦痛を避けようが、苦痛を愛そうが、どちらもすばらしいということになる。人を殺してもすばらしいし、殺さなくてもすばらしい。しかし、自分がよい人間であることを知れば、人は殺さない、と。この肯定は神が天地を創造したときの喜びの言葉に対応しているらしい。キリーロフは生はあるが死はないと断言する。そして、キリーロフはこの世の永遠の刹那を信ずるといふ。それは時のない、永遠の生である。シャートフとの会話で、この「永遠の刹那」がより明確になる。これは5, 6秒しか続かないもので、この時に永久調和が実感される。これは天上のものではないが、肉体的な変化なしには地上の人間には耐え切れないという意味で、地上のものでもない。これは明晰で喜びの感覚だといふ。この5, 6秒にキリーロフは一つの生を生きる。この時のために全人生を投げ出しても惜しくないといふ。これはムイシュキン公爵が経験したもので、シャートフはテンカンを疑う。

キリーロフの心境の変化は分かりにくい。どんどん神懸りのようになって、自分の思想をキリスト教のそれと対比する傾向が強くなっている印象だ。すべてがすばらしいとキリーロフは言うが、どうも人を殺さない方がいいようだ。キリーロフが生はあるが死はないといふのは重要だ。かれにあるのは生と「永遠の刹那」だ。この刹那は生と（生活と、といった方が正確か）どのような関係にあるのか述べられていないので、分かりにくい。強さを別にすれば、多くの人が、墓場までもって行く、同じような瞬間を持っているのではなかろうか。「永遠の刹那」はキリーロフの思想を感覚面・身体面から支える意味で必要だったのだろう。新しい人に生じる肉体的な変化という点にそれが関係するように思う。しかし、このキリーロフの経験に関して、私はシャートフの意見に賛成だ。キリーロフもムイシュキンも、そしてドストエフスキーもテンカンの発作が起こったとき、この感覚が持続することを願っただろう。しかし、それは続かず、意識の喪失がやってくる。キリーロフはムイシュキン（そして、ドストエフスキーも）と同じように「病気だからといって、それがどうだといふのだ」といふだろうが、それは病に基づく感覚であり、私を含め多くの人には同じ体験ができず、理解することは難しい。

ところで、なぜ自殺が必要なのかわからない。それは次のピョートルとの会話で明らかになる。ピョートルとの会話では当然自殺することが前面に出てくる。神は必要だから存在するはずだが、神は存在し得ない。このような二つの考えを持ちながら生きてはいけないと思う人がおり、それは自殺に値するとキリーロフはいう。もし神がいなければ、自分が神である。神がいればすべての意志は神のものだが、いなければすべての意志は自分のもので、自分は我意を主張する義務があるとキリーロフはいう。神を滅ぼし、すべての意志が自分のものになったのに、完全なる点まで我意を主張する人間は一人もいない。我意の頂点は自らを殺すことだから、自分には自殺の義務がある。これまで多くの人が自殺したが、我意のためのみに自殺するのは自分だけだ。我意を示すのに他人を殺すのは最低のことだとキリーロフはいう。神がいけないという思想以上に高いものはない。これまでは自分を殺さずに生きていけるように、神を考え出してきた。自分が神を考え出そうとしない

最初の人間だ。『白痴』のイポリートと同じように、かれも自然の法則はキリストをも飲み込んだと考える。そうであるならば、全地球は虚偽であり、地球の法則も虚偽である。自分が神であれば虚偽は終わりになり、虚偽の根源は古い神の存在であるから、自分は我意のためにのみ自殺することで、この人神思想を万人に宣言するのだとキリーロフはいう。神がないことを知りながら、自分が神になったと意識しないのはおかしい。そう意識すれば、必ず自殺するはずだ、と。

以下、素人の特権の行使ですが、この思想を読んで心から理解できないことがない。まず、私はそして多くの日本人は唯一で絶対的な神を持ってこなかった。キリスト教徒も多くない。本文には聖書からの引用がところどころにあり、議論はキリスト教との比較で語られる傾向がある。言い換えれば、その枠を出していない。自分の意志が神のものという考えは、われわれにとって一般的とは思えない。キリーロフの思想はそのような神を前提としているのだが、その前提がないので、すべてが曖昧な理解しかできない。絶対的なものを持たないわれわれは、己を、我意を絶対的なものとする傾向も弱い。「恐ろしい自由」といわれてもピンとこない。神の問題は 19 世紀の西欧では重要なテーマだったと思うが、21 世紀の現在はどうだろうか。

C. 『カラマーゾフの兄弟』ーイワンとアリョーシャ

『カラマーゾフの兄弟』の思想面はイワンの「大審問官」とアリョーシャの「ゾシマ長老の談話記録」の対立として表現されていると述べた。まず、イワンの大審問官の主張を紹介し、続いてアリョーシャがどのようにそれに反論したかを辿ってみたい。ドストエフスキーは「堂々たる反論」と述べていたようだ。

1. イワンの「大審問官」

a. 「場違いな会合」

この会合はフォードル親父とドミートリイの争いをゾシマ長老に調停してもらおうという名目で親父が提案し、修道院で開かれた。親父、三人の息子たち、ミウソフが参加したが、誰一人として無事に終わるとは考えていなかった。実際にフォードル親父が会合をブチ壊してしまう。ここでこの会合についてふれるのは、教会裁判についてのイワンの論文や、「神がいなければ、すべてが許されている」というイワンの主張が紹介されているからである。宗教絡みでは、国家と教会の関係も議論されている。しかし、日本では、また欧米でも 21 世紀には興味をもたれない議論ではないだろうか。

イワンの主張はこの物語の一方の中心なので、説明が必要である。人間はこれまで自分の不死を信じていたから、この世に愛があり、同胞を愛してきた。すなわち、神を信じてきたからお互いに愛することができたのであって、それは自然の法則によるのではない。

言い換えると、不死への信仰を根絶やしにしてしまえば、愛はなくなり、生きる力もなくなってしまふ。不道德なことはなくなって、すべてが許されることになる。神も不死も信じない者にはエゴイズムは許され、認められるべきである。

このイワンの説はミウソフがからかい半分に紹介したものだが、突然ドミートリイが質問をする。「無神論の立場からは、悪業は許されるばかりでなく、必要で賢明なものとして認められるべきである」ということか、と。この問いに肯定的な答えを聞くと、かれは「おぼえておきましょう」という。これはかれが父親殺しを行うかもしれない不安を引き起こす。ゾシマ長老は、イワンの内部でこの問題はまだ解決されていない、それがイワンの苦しみのすべてだと語り、解決することを祈る。長老がイワンを祝福しようとした時、イワンは椅子から立ち上がって長老に歩み寄り、真面目で厳粛な態度で祝福を受けた。イワンは勇ましいことを言うが、内面あるいは無意識的には苦しんでいたのだろう。この主張をそのまま受けとったスメルジャコフからその点を揶揄されることになる。この後、フョードル親父の道化芝居がはじまり、ドミートリイは激高して「こんな男がなぜ生きているんだ！」と叫ぶことになる。これも小説の筋に関係する。そしてゾシマ長老はドミートリイの前で床に頭をつけるようにして跪拝した。長老はドミートリイの過酷な運命を予見したようだった。

b. 「コニャックを飲みながら」

フョードル親父は夕食の後にコニャックを飲みながら議論をするのが好きだった。ある日、それまで話すことなどなかったスメルジャコフが急に喋り出した。イワンに教わりいろいろと知識を蓄えたスメルジャコフは、キリスト教を信じている召使のグリゴーリイと宗教についての論戦を行ったのだ。

その後、フョードル親父はイワンとアリョーシャに神や不死はあるのか？と問う。イワンはないと答え、アリョーシャはあると答える。イワンはフョードル親父から、じゃあ、誰が人間を愚弄しているのか？と問われ、悪魔でしょう、と答える。親父から、悪魔はいるのか？と問われ、イワンは悪魔もないと訂正する。何気ない会話だが、神を否定し、悪魔も否定したイワンは後に夢とも幻覚ともつかない状態で、悪魔に出会うことになる。

このあと、ドミートリイが乱入し、フョードル親父を投げ飛ばし、顔に踵で2、3度蹴りを入れている。ドミートリイを押し返した後で、イワンとアリョーシャは話し合うが、イワンは、誰かはもう生きる資格はないと希望する権利は皆が持っている、と述べる。これはイワンがスメルジャコフに父親殺しの「許可を与える」という話の筋に関係する。

c. 「反逆」

アリョーシャはイワンと話をしたかったようだが、イワンはそれに気づいていても素っ気なく対応し、親密に話す機会はなかった。ところがイワンが町を出る前日に偶然に「都」という料理屋で兄弟は最初で最後の会話を交わした。イワンによれば、そのような出会い

と別れが最もよいという。話は多岐にわたったが神の話になってゆく。そして、イワンは神を認めるが、神の創った世界、神の世界を認めることはできないと述べる。

アリョーシャからその説明を求められたイワンは、自分は身近なものを愛せないという告白から始める。聖書には、隣人を愛せ、という言葉が何回か出てくるので、これはキリストの教えへのあからさまな挑戦、反逆だろう。そして話は子供たちの苦悩に移っていく。これもゾシマ長老が尊んでいるヨブの話しへの反論だろう。イワンは小児虐待の事例を次から次へと語る。そのあるものは『作家の日記』に取り上げられている。クロネベルクという実業家が娘を枝で鞭打っている事件だ。この男は笞で打つたびに快感が高まるのだらうとドストエフスキーは考えている。作家は『死の家』で出会った同じ体質の笞刑執行人ジェレビヤトニコフを思い出したことだろう。また、自分の犬にけがをさせたという理由で、その子供に犬をけしかけ食い殺させた領主の話もある。

イワンは犬に食い殺された子供の母親とその領主がともに抱き合い神をたたえること、すなわち、永遠の調和が訪れることの意味をよく理解している。しかし、イワンはそれでは虐待された子供たちの苦しみが償われていないと非難し、それは認められないという。ヨブの話しへの反論であり、神への反逆である。イワンは調和などいない、報復できない苦しみを抱き続けた方がいい、たとえ自分が間違っているとしても、癒されぬ憤りを抱き続けた方がいい、という。この言葉はドストエフスキーが流刑地でフォン・ヴィジン夫人に書いたキリスト礼讃の手紙の裏返しのようなだ。イワンはアリョーシャに問う。人間に幸福、平和で安らぎを与えるために建物を建てるとして、子供の償われない涙の上にそれを建てなければならないとしたら、おまえはその建築家になれるか、と。アリョーシャはそれはできないと言い、兄さんは大事な人を忘れていると言って、キリストを持ち出す。イワンはキリストがでてくることを予期しており、キリスト批判を劇詩の形で行う。それが「大審問官」である。

d. 「大審問官」

「大審問官」はイワンが創作した劇詩である。舞台は 16 世紀のスペイン、セヴィリヤ。キリストがこの町を訪れる。人々はかれがキリストであることを直ぐに理解し、かれに従う。キリストは奇蹟を起こし、人々はかれを賛美する。それを観ていた大審問官はかれを捕え、神聖裁判所の牢にぶち込む。その夜、大審問官は牢を訪れ、かれに自分の考え、キリスト批判を話す。聞き手は一言も発することなく、穏やかな目で大審問官の話を聞く。

話の内容は聖書に基づいている。ドストエフスキーが流刑地の監獄で読むことが許されていたのは聖書のみだった。4 年間聖書を熟読した作家の劇詩を、キリスト教徒でもなく、ロクに聖書を読んだことがない私には十分に理解したとはとても言えない。大審問官の話は聖書にある悪魔の 3 つの試みが核になっている。そして、大審問官はキリストが 3 つの試みを拒否したことを批判し、自分は悪魔の側に立つことを打ち明ける。話は多岐にわたるが、この核の部分に焦点を当てて紹介する。悪魔の 3 つの試みとは「石をパンに変えて

みよという話」、「神殿の上から身を投じてみよという話」そして「自分を拝跪すればこの世の富や権力を与えるという話」である。キリストは無論これらの試みを拒絶したのだが、そこにあるキーワードは「自由」である。以下、テキスト通りにはなっていないが、紹介してみる。

大審問官はキリストが石をパンに変えることを「人はパンのみで生きるのではない」と拒否したのは、パンで買われた信仰でなく自由な信仰を欲したからだという。この自由な信仰、天上のパンのために数千、数万の偉大で強力な意志を持った人々はおまえ（キリスト）に従うだろうが、無力で意気地のない下司野郎の無数のフツーの人、神のできそこないが地上のパンを求めたからと言って非難できるか。それではおまえは数万の神のような人々のもとに来たにすぎないではないか。残りの大多数のフツーの人は天上のパンでは生きていけないのだ。

大審問官は次に拝跪の対象の話に移る。大審問官は非難する。おまえは「ただ神を拝跪し、神のみに仕える」と拒否した。おまえは自由と天上のパンの名において、地上のパン、だれもが拝跪する絶対的な旗じるし、地上のパンを拒絶してしまったと。フツーの人にとって、自由ほど厄介なものはないのだ。自由は恐ろしいものなのだ。早いところ、誰かに譲り渡して、平穏を得たいのだ。地上のパンを持つ者は、富と権力を持ち、かれらの心を平穏にできるのだ。天上のパンはかれらにとって石ころだ。わしらはその石ころを地上のパンに変えてやるのだ。無論、これがまやかしに過ぎないことは分っている。われわれはこのまやかしを引き受けなければならない。かれらのような無力で意気地のない下司野郎に永遠の生などあり得ない、無があるのみだ。

そして悪魔の神殿の上から身を投じてみよという試みの話になる。おまえはこれも「神を試みてはならない」と拒否した。それは奇蹟による信仰でなく、自由な信仰を望んだからだ。だが、フツーの人がおまえのように振舞えると思うのか。かれらは神よりも奇蹟を求めているのだ。かれらにとって信仰は奇蹟から生まれるのだ、信仰から奇蹟が生まれるのではないのだ。

キリストは大審問官の話を終始無言で聴いていたが、最後に大審問官に歩み寄り唇にキスをした。キリストが行った行為はこれだけである。大審問官は身震いをし、唇の端がピクリと動く。結局、大審問官はキリストを牢から出してやる。そして、すでに述べたように、イワンは「大審問官」を語った後、アリョーシャと決別し、無意識のうちにスメルジヤコフに「父親殺し」のゴーサインを出してしまう。

2. アリョーシャによる「ゾシマ長老の談話記録」

大審問官については、その考えを評価し擁護する意見と、逆にキリストを評価し大審問官の考えを否定する意見があるようだ。それらはワッサーマンの『ドストエフスキーの「大審問官」』という本にまとめられている。「大審問官」でかれ、キリストは一言も反論することなく、ただ大審問官の唇に接吻をただけであった。それゆえ、いろいろな解釈が可

能である。無論、読者は小説をどう読もうと自由だ。ここではドストエフスキーがどう考えて小説を書いたか、アリョーシャがイワンにどう反論したかを辿ってみたい。

a. ゴシマ長老の兄マルケル

マルケルは17歳で亡くなったゴシマ長老の兄である。長老はアリョーシャを愛していたが、アリョーシャの精神、心持が兄に似ていたからだという。マルケルは自由思想のため流されて町に住んでいた大学教授の哲学者からいろいろと教わっていた。その学者はペテルブルグに戻ったが、マルケルは学者から学んだ無神論を信じていた。マルケルは結核になり長くはないことをさとると、母のすすめもあり、教会に行くようになった。しかし体力は衰え、家で懺悔や聖餐をうけた。マルケルは夜通し咳込んだが、快活で、人生は明るく楽しいものだという。召使には今度は自分がおまへたちに仕えると言い、人間はだれでも、あらゆる人あらゆるものに対して、すべての人の前に罪があると言う。そして、小鳥にまで犯した罪の許しを乞うようになった。神の栄光があふれている自然を賛美した。マルケルはゴシマに自分の代わりに生きてくれと言い、間もなくして亡くなった。イポリート、キリーロフの自然とは異なる自然だ。イワン、大審問官の人間侮蔑と正反対である。

b. ゴシマ長老と聖書

ゴシマは幼年時代の思い出ほど尊いものはないと言う。8歳の時、教会でヨブの話聞いた。裕福で心正しい神のしもべヨブは子供たちと暮らしていた。サタンはヨブの財産を奪い、子供を殺して、ヨブに神を呪わそうとした。しかし、ヨブは変わることなく神を讃え続けた。これを聞いて幼いゴシマは感動し、初めて神の言葉を受け入れた。この話には多くの偉大な、神秘的な、想像しがたいものが含まれている、移ろいゆく地上の顔と永遠の真理とが一つに結ばれ点にこそ偉大なものが存在するとゴシマは言う。既に述べたが、これはイワンの、子供の苦しみが償われていないという考えと対をなすものだ。

アリョーシャの記録では民衆に聖書の読み聞かせることの大切さ、民衆への信頼、『死の家』のアレイがモデルと思われる青年と神の恩寵に満ちた自然について語られる。民衆への信頼、神の恩寵に満ちた自然はイワン、大審問官、イポリート、キリーロフの考えとは対極にある。

c. ゴシマ長老の若い頃の思い出：従卒アフナーシイと決闘

ゴシマは士官学校に入学し、将校になった。聖書など読まず、薄情で野蛮、醜悪で愚かな人間になり果てていた。ゴシマはある令嬢に恋心を抱いたが、かの女は既に婚約しており、別の男の所へ嫁に行った。若いゴシマはその男の名誉を傷つけ、決闘を申し込んだ。決闘の前日の夜、ゴシマは従卒のアフナーシイを殴ってしまう。朝、起きると気分がすっきりしない。心の中に恥ずべきこと、卑劣なことがあるように思われた。太陽が輝き、小鳥が鳴き、木の葉がひらめいている。若いゴシマはいきなり兄マルケルを思い出す。人

間はだれでも、あらゆる人あらゆるものに対して、すべての人の前に罪があるというマルケルの言葉を思い出す。ゾシマはアフナーシーに伏して謝罪し、決闘はピストルを放り投げてやめてしまった。これがきっかけで、ゾシマは修道院に入るようになった。

d. ゾシマ長老の若い頃の思い出：神のしもべミハイル

決闘の話が知れ渡り、ゾシマは町の人気者になった。多くの人がやってきたが、その中に一人の紳士がいた。かれは町の有力者で、裕福で恵まれない人に巨額の寄付をしている立派な人だった。匿名で多くの善行を行っていたことも死後明らかになった。かれは逡巡していたが、とうとう殺人を犯したことをゾシマに告白した。その男はある未亡人に恋をして結婚の申し込みをしたが、断られて家への出入りを断られてしまう。ある夜男は未亡人の家に忍び込み、復讐と嫉妬のあまりかの女を殺してしまう。殺人は露見せず（召使が誤って逮捕され、獄中で死んでしまう）、男はできる限りの善行を行い、殺人の埋め合わせをしようとした。しかし、良心の呵責を鎮めることはできなかつたし、心の平安を得ることはできなかつた。男は告白をしたことでゾシマを憎悪し、殺そうとするが思いとどまる。しかし、かれは家族の反対を押し切り、パーティの後で当局宛の自白書を朗読する。直ぐに男は病になり死の床についてしまう。ゾシマが面会した時には衰弱していたが、感動に満ちた晴れやかな眼をしていた。これが神のしもべミハイルの話である。ミハイルは人々が自分の穴倉に閉じこもり、孤立し、人の助けも人間も人類も信じないようになっていると言う。「個人の特質の真の保証は、孤立各個人の努力にではなく、人類の全体的統一の内にあるのだ」と。全体的統一の核にはキリストがいるのだろう。このミハイルの言葉はイワンの「独立」が孤立であることを示している。

e. ゾシマ長老の法話と説教：修道僧について

ゾシマ長老は語る。修道僧はしばしば世間から嘲笑され、罵声を浴びせられている。現代の俗世では人々は欲求を満たすことは権利であると奨励され、その中に自由があると考えている。しかし、その結果、富める者は孤独と精神的自殺、貧しいものは妬みと殺人に向かう。かれらは兄弟愛とか人間愛、人類愛、人類の統一などと喧伝するが、孤独になった人間に他者、人類、全体などに何の意味があるのか。自由をこのように捉えては、「崇高」な目標は達成できない。修道僧の贖罪のための勤労、精進、祈祷の中にのみ真の自由への道があるのだ。精進と無言の行に励む謙虚で柔和な修道僧が民衆と共に立ち上がり、ロシアは統一されるだろう。これは神のしもべミハイルの言ったことの展開であり、大審問官への批判になっている。すなわち、地上のパンを重視しても争いを拡大させるにすぎないこと、キリストは少数の強者の元に来たのではないこと、などである。

f. ゾシマ長老の法話と説教：主人と召使

とはいえ、民衆にも墮落している者がいる。しかし、ロシアの民衆は神を信じ、自らの

行為を恥じている。上流社会の人々はキリストなしに体制を作ろうとしている。神がいないので、犯罪も罪悪もないと考える。しかし、兄弟愛なしに公平な分配などない。人間に公平な分配など行えるはずはないと大審問官も認識しているが、かれはキリストの名を騙って「公平」な分配を行おうとするニセモノである。

ところで、ゾシマ長老は巡礼の途中で従卒だったアフナーシイに偶然出会う。色々と話す中で、主人と従卒という立場を越えた人間的結合が生まれた。当然、兄マルケルの言葉やアフナーシイへの謝罪、神のしもべミハイルのことが思い出された。そして、みずからすべての人の召使になろうと望めば、兄弟愛、人間の結合が広がり、人々は孤独から解放されるだろうとゾシマは言う。

g. ゾシマ長老の法話と説教：祈り、愛、他の世界との接触

祈りを忘れてはいけない。祈りは教育なのだ。今日亡くなったすべての人たちのために祈りなさい。神のすべての創造物を愛しなさい。植物を、動物を、子供たちを愛しなさい。自分を人々のすべての罪の責任者とみなしなさい。そうすれば、自分がすべての人のすべてのものに対して罪ある身だと気づくだろう。それがサタンの傲慢さを避けることになる。これらは兄マルケルが言い、行ったことであり、イワン、大審問官の対極にある考えだ。

この地上でわれわれが理解できないことは多いが、天上の他の世界とつながっているという貴い感情が与えられている。われわれの思考と感情の根はこの世ではなく、他の世にあるのだ。神は他の世界から種子をとってこの世に播いた。だから、人間を含めすべてのものは神秘的な他の世界と接触しているという感情によって生き、澆刺としているのだ。その感情が弱まれば、人生に無関心になり、憎むようになる。イポリートもイワンもこの世には分らないことがあると言い、神をその中に入れていた。ゾシマ長老に言わせれば、分らないのは傲慢で神を認めないからだと言うことになる。

h. ゾシマ長老の法話と説教：審判者、最後まで信じること

人は誰の審判者にもなりえないとゾシマ長老は言う。自分自身がやはり罪人であり、審判を受ける者の罪に誰よりも責任があるから。アリューシャが父を責めなかったことと関係あるだろう。また、大審問官に対してキリストが一言も発しなかったことと関係するかもしれない。ここでキリストが大審問官に行った唯一の行為がでてくる。接吻である。ゾシマ長老は言う。罪人が接吻に対して冷笑的であっても心惑わされることはない。いずれ罪人は罪を分るだろうし、分らなくとも他のものが代わりにさとり、苦しみ、裁き、自分を責めるだろう、と。キリストが大審問官をどう評価したかは意見が分かれるところだ。しかし、「大審問官」におけるキリストの行為は、大審問官の考えを決して是認していなかったことを示している。「大審問官」はイワンの創作だが、時折イワンとゾシマは同じ認識を持つ。ただし、最後の所でイワンはキリストをとらない。

ゾシマ長老は言う。誰からも相手にされず一人になっても大地にひれ伏し、大地に接吻

して、喜びの涙で大地を濡らし、愛するがよい。あらゆる人を愛し、あらゆるものを愛するがよい。そして神をたたえるのだ。そのようなことは選ばれた者のみができることなのだ。後で述べるように、これは蘇生したアリョーシャが行った行為だ。イワンも大審問官も自分を選ばれた者と考えているようだが、エライ違いである。

i. ゴシマ長老の法話と説教：地獄

地獄とはもはや二度と愛することができない苦しみだとゴシマ長老は言う。「われ存す、ゆえに愛す」と自分に言う能力を与えられたが、そうしなかった。地上を去ればもう愛する機会はない。それが地獄の精神的な苦しみだ。このことをすっかり理解しているが、サタンの傲慢な精神に共鳴している人々がいる。かれらは赦しを拒否し、神を呪う。まだまだ続くのだが、イワンや無神論者のことを言っているように思われる。

以上がドストエフスキーの「堂々たる反論」である。なお、ボイス＝ギブソンによる『ドストエフスキーの信仰』という本がある。

『カラマーゾフの兄弟』では夢が重要な役割を演じている。三人の兄弟の夢を追ってみる。

3. アリョーシャの夢：ゴシマ長老の死と復活

ゴシマ長老の死期が近づいていた。「場違いな会合」につきあったり、やってくる人々の話を聞いたり、祝福したりしていたが、疲労は甚だしかった。最後の晩、長老は元気で雄弁だった。しかし、胸に痛みを感じ、顔は蒼白になった。長老は椅子から床におり、大地にひれ伏し、歓喜に包まれたかのように大地に接吻し、祈りながら、嬉しげに息を引き取った。

アリョーシャを含め多くの人が何か奇蹟が起こることを期待した。しかし、何も起こらず、長老の遺体は思ったより早く腐臭を発し始めた。その結果、長老を非難するものもあらわれた。アリョーシャは敬愛する「顔」が嘲笑され、愚弄されたことに怒り、悲しみ、苦しみ、動揺した。自暴自棄になったアリョーシャはラキーチンに伴われてグルーシェニカの所へ行く。かの女はアリョーシャを「取って食う」つもりだった。グルーシェニカがアリョーシャの膝に乗っている時、ラキーチンが長老の死をかの女に伝えた。グルーシェニカはあわてて膝から降り、十字を切る。アリョーシャの魂はかの女が憐れんでくれたことで蘇生する。そして、グルーシェニカを誠実な姉と呼び、かの女の中に愛に満ちた魂を見出す。「一本の葱」である。そのような温かい言葉をかけられたことのないグルーシェニカは感激するが、自分はそのような女ではないと自らを汚すようなことを言う。そして、昔の男に会いにモークロエを目指す。しかし、モークロエではドミートリイとのドンチャン騒ぎが待っていた。

夜、蘇生したアリョーシャは修道院に戻り長老の亡骸の前で祈る。腐臭はもう気になら

ない。パイーシイ神父が聖書の朗読をしている。ガリラヤのカナのところで。アリューシャはそれを聞きながら夢を見る。カナの婚礼の夢だ。亡くなった長老が現われてアリューシャとともに祝おうと呼びかけてくる。長老は復活した。当然、あの方（キリスト）も列席している。何かアリューシャの心の中で燃え、何か不意に心を満たし、歓喜の涙がほとぼしる。アリューシャは目覚め、そしてこの小説の中で最も感動的な場面になる。

アリューシャは庵室を出た。かれの歓喜に満ちた魂は自由を、広い空間を求めていた。夜空に星が輝き、天の川が走っている。かれはふいに倒れ伏し、泣きながら、涙を降り注ぎながら、大地に接吻し、大地を愛し続けることを誓う。かれの魂は「あの世」と触れあってふるえ、すべてに対してあらゆる人を赦したいと思い、自らも許しを乞いたいと思った。かれはゆるぎなく確固とした何か自分の魂の中に下りてくるのを感じる。このことは一生涯、永遠に続くものであり、この一瞬をかれは決して忘れなかった。大地にひれ伏したかれは弱い青年であったが、立ち上がった時は堅固な闘士になっていた。

4. ドミートリイの夢：地底の賛歌

イワンの悪夢について述べる前にドミートリイを蘇生させた夢を紹介する。モークロエでグルーシェニカとドンチャン騒ぎをしている頃、フォードル親父が殺されたことがわかり、ドミートリイに嫌疑がかかった。警察、検事がモークロエに急行しドミートリイを尋問した。検事とのやりとりにくたびれたドミートリイは睡魔に襲われ、眠りこむ。そして、夢をみた。ドミートリイは11月のみぞれが降る中、馬車で曠野を通っていた。かれは焼け出された百姓たちに出会う。女たちが赤ん坊を抱いている。乳が出ないのか、赤ん坊は泣き叫んでいる。ドミートリイはなぜ女たちは立ちつくしているのか、なぜ貧乏なのか、赤ん坊はなぜかわいそうなのか、女たちはなぜ抱き合って接吻しないのか、なぜ喜びの歌を歌わないのかと問う。そして、感動し、泣きたくなる。かれは女たちや赤ん坊たちが泣かなくて済むように、何かしてやりたくなった。ドミートリイはグルーシェニカの一生あなたについていくという言葉で目覚め、生きていたい、新しい光に向かって歩き続けていきたい、今すぐに、たった今から、と思う。この思いはアリューシャの無条件で生を愛するという言葉と共鳴している。

裁判の前日、ドミートリイはアリューシャと会う。ドミートリイは新しい人間が自分の内部に蘇ったという。これは上記の焼け出された女や赤ん坊の夢のことだ。かれは言う、20年間鉱山でつるはしをふるうことなど何でもない、恐れているのは、新しい人間が自分から離れはしないかということだ、と。われわれはみんな、すべての人に対して罪がある。すべての哀れな、苦しんでいる人のために自分は行かねばならない。地底では神様なしにはやっていけない。地底の人間は神への賛歌を歌うのだ、と。

ここでドストエフスキーはラキーチンを登場させ、ドミートリイの崇高さを際立たせている。ドミートリイは何事かを避けるように周辺飛行をする。それはアリューシャに自分が親父を殺したと信じているのか、信じていないのか、本当のことを言ってくれ！と詰問

することが怖かったから。無論、アリョーシャは信じていない！と答え、ドミートリイは蘇生する。アリョーシャは兄のやり場のない悲しみと絶望と深淵を理解した。この後、アリョーシャはイワンの所に行き、父親を殺したのは「あなたじゃない」と言うが、イワンの心には届かない。

なお、地底の賛歌の話には後日談がある。有罪が確定した後、アリョーシャはドミートリイに、兄さんはまだ十字架を背負う心構えができていない、十字架は必要ない、と言う。無実の兄さんには十字架は重すぎる、兄さんの内部に生まれた新しい人間を忘れなければ、それで十分だ、と。アリョーシャはゾシマ長老譲りの柔軟で、現実的な対応をとることができるようだ。

5. イワンの悪夢：悪魔との会話

a. スメルジャコフとの面談

父親の死後、イワンはモスクワから町へ戻ってきた。かれは父親の死に関して 3 回スメルジャコフと面談した。イワンはドミートリイが犯人と思っていたが、アリョーシャはスメルジャコフが犯人だと言う。チェルマーシニャ（モスクワ）行きやテンカン（イワンはスメルジャコフのテンカンを詐病と疑っていた）など自分でも気がかりな点があり、1 回目の面談でイワンはスメルジャコフを問い詰める。スメルジャコフは適当にはぐらかし、イワンはそれを信じて束の間の安心を得る。

2 回の面談で、スメルジャコフの態度はふてぶてしくなり、自分の先生であったイワンを小馬鹿にするかのように振舞う。「賢い人におなりなさい」。スメルジャコフはイワンの無意識的だった行動を意識的なものと受け取っており、この面談はイワンの無意識だった部分を暴き出すことになる。イワンはスメルジャコフに対する疑いを強めたが、人々を納得させる証拠がない。苛立った気分の中で、イワンはカテリーナから「数学的に明白な証拠」であるドミートリイの手紙を見せられる。その中でドミートリイは親父を殺して金を奪い、カテリーナへ返却すると書いてあった。イワンは再び束の間の安心を得る。しかし、心の平安は直ぐに破れる。イワンはドミートリイに脱走の計画を提案する。なぜそのような提案をしたのか。イワンがそれを認識できるようになるのは 3 回目の面談を経験する必要があるだろう。

スメルジャコフが病気になったと聞き、イワンは再びスメルジャコフを尋ねる。スメルジャコフはすっかりやつれていたが、さらに横柄にイワンに対応した。この 3 回目の面談でスメルジャコフは、イワンの質問に答えつつ、自分の犯行であることをすっかり説明した。イワンと一緒にフォードル親父を殺したのだと。ドミートリイが犯人だと思っていたイワンは衝撃を受ける。スメルジャコフは「すべてが許される」と言っていたのにどうしたのですか、とイワンを揶揄する。かれはイワンの人となりを暴く。父親の死を強く望み、お金が大好きで、美しい女性も大好き、気位が高く、誰にも頭を下げたくない、精神は兄弟の中で父親に一番似ている、父親と瓜二つだ、と。スメルジャコフはフォードル親父か

ら盗んだ三千ルーブリを不要になったとイワンに渡す。イワンは明日の法廷でこの三千ルーブリを提出し、犯罪の真相を話すと言う。スメルジャコフはそんな話は誰も信じないと一蹴する。スメルジャコフは宗教関係の本を読み、神様を持ち出すようになっていた。

b. 悪夢と錯乱

スメルジャコフの家から戻ったイワンは、眠っているのか覚めているのか判然としない状態で、一人のパツとしない紳士、悪魔と向き合う。この悪魔がイワンの所を訪れたのは2回目だったようだ。イワンには悪魔が幻なのか、それとも現実なのか分からない。言い換えると、自分の分身なのか、そうでない実在なのか悩む。悪魔はなぜか自分の実在を認めさせようと躍起になる。神と悪魔は相互に存在を証明しているようなところがあり、悪魔が実在するのなら、神も存在するだろう。それはイワンの考えの敗北を意味する。無神論者は自分の思想が悪魔を生み出したとは考えたくないだろう。イワンは悪魔を自分の分身と思っているが、自分とは関係なく実在して欲しいとも考えている。しかし、「コニャックを飲みながら」で神も悪魔も否定したイワンには、幻であれ、現実であれ、悪魔は苦痛以外の何物でもないだろう。悪魔はイワンの心の揺れを楽しんでいるかのようである。イワンは錯乱、発狂せざるを得ない。

悪魔との会話はイワンの楽屋裏を明らかにするようなことがあり興味深い。感じやすく、芸術的感性の強い（と自認する）悪魔は、キリストが十字架の上で死んで天に昇るのに居合わせた。小天使、大天使のコーラスに合わせ、神をたたえてホサナ！ともう少しで叫びそうになった。しかし、自分がいなかったらどうなるかと考えた。悪が消え、善しかない世界。この世のすべてが消えうせ、何事も起こらなくなってしまう、新聞もなくなる。で、悪魔の常識に従って、仕方なくキタナイ仕事をしているという。悪だけでなく、キリストについても深く考えていたイワン、ドストエフスキーに重なる。

天国へ行った無神論者の話もある。その男はふてくされてしばらく横になっていたが、罰である千兆キロメートルを歩き通して、天国に迎えられた。その男は千兆キロの千兆倍のさらに千兆倍でも歩けるぞ！と叫ぶ。要するに、ホサナを叫んだ。あまりに激しい転向に天国の人たちはシラケたようだ。ドストエフスキーの生涯を連想させるような気がしないでもない。この挿話の中に永劫回帰の話が出てくる。

「地質学的変動」で悪魔はイワンを徹底的に愚弄する。地質学上の時期と並行して、人類が一人残らず神を否定する時が来る。それまでの世界観や道徳はすべて崩壊して新しいものが訪れる。人間は神のような誇りの精神で傲慢になり、やがて人神が出現する（これはキリーロフだ）。自己の意志と科学により際限なく自然を征服し、天上の喜びに代わって地上の喜びを感じるだろう。人間はいずれ死ぬ身であり、復活など考えずに、冷静に死を受け入れる。人生は一瞬にすぎないという自覚のゆえに、人々は深く愛し合うようになる。しかし、このような時期が来て安定するのはいつのことか。人類の愚かさを考えると今後千年は安定しないだろう。この真理を認識している者は、自分の好きなように安定するこ

とが許される。すなわち、人神になり「すべてが許される」のだ。必要ならば、古い道徳を無視することが許されるのだ。自分の立つところが、第一等の席なのだ。こんな具合にイワンの思想の負の側面が徹底的にあばかれる。イワンは悪魔にコップを投げつける。

その時、アリョーシャがスメルジャコフの自殺の知らせを持ってきた。悪魔は消えうせたが、イワンは完全に錯乱、発狂していた。そして、悪魔が言ったという言葉を喋りまくる。スメルジャコフの自殺は悪魔が教えてくれたので知っていた。君（イワン）は明日法廷で証言するだろう。それは誉めてもらいたいからだ。君の証言でスメルジャコフは有罪になり、ドミートリイが無罪になり、そして君は精神的に裁かれるだけでほかの人たちから賞賛されるという希望があった。ところが、スメルジャコフは死んでしまった。もう君の証言を信じる者はいないだろう。一体何のために君は出廷するのだ？君にとって善なんて何の意味があるのだ？でも、君は行くだらう。行かずにいる勇気がないからね。「そんな驚は大空高く舞うことはできないよ！」誇り高いイワンはこの最後の言葉を耐えることができなかった。

法廷でイワンは証言する。スメルジャコフが渡した三千ルーブリを提出し、自分がスメルジャコフをそそのかして、父親を殺させた。誰だって父親の死を望んでいるのだ！イワンは法廷から連れ出される。裁判官や陪審員は、支離滅裂なイワンの証言を心の病のせいにして、信ずることはなかった。ここでカテリーナが登場して、例の「数学的に明白な証拠」の手紙を提出しドミートリイを破滅させることになるが、それはこの場のテーマではない。人神たらんとしたイワンは持ちこたえることができなかったのだ。

D. ひるがえって

以上、『カラマゾフの兄弟』の思想的な対立を、『白痴』、『悪霊』も含めてたどってみた。特定の宗教を信じておらず、キリスト教を理解していない私には分かり難いことが多い。一神教の世界になじんでいないので、なぜ神を否定すると、自らが神にならなければいけないのか分らない。われわれはそれほど傲慢になれない。「恐ろしい自由」も分かり難い。世界の戦争の多くが宗教対立から起こっているのは真実だろう。複数の一神教があれば、大審問官が見通したように、争いが起こるだろう。やれ聖戦だ！やれ十字軍だ！と騒がしいのも特定の宗教を信じている人たちだ。大昔に読んだ江戸時代の役人？の話を思い出す。その役人はキリスト教の崇高さを語る欧州からの来訪者に、次のように質問したという。そうであるならば、なぜ、お国ではしょっちゅう戦争があるのか、と。日本人は一般に無宗教なのになぜ犯罪が少ないのか、と西欧人は疑問に思うようだ。しかし、どのような宗教を信じていてもエライ人もいればコマッタ人もいる。宗教を信ずるか否かは、人の生き方の問題で、善悪の問題ではないだろう。ある論文によると、キリスト教、イスラム教、仏教などモラル化した宗教に共通するのは、「己が欲しないことを他者にするな」

とか「他者からしてほしいことを、他者にせよ」といった相互主義の教えで、これを黄金律 **Golden Rule** と呼んでいた。この **Golden Rule** がしっかりと根づいていれば、特に宗教を信じなくてもいいのだろう。一般に日本人は他者を尊重する傾向があるようだ。今回の大震災などで抑制した態度がとれたのは、このような事情があるのだろう。

「個人はすべての人々に責任がある」という意味のことがドストエフスキーの宗教の基本にあるようだ（これは宮沢賢治の考えと似ている、宗教は違うが）。**Golden Rule** をつきつめるとこの言葉になるだろう。私共できそこない、フツーの人にそこまで要求されても困る。**Golden Rule** をできるだけ尊重することで勘弁してもらおう。すでに述べたが、私は特定の宗教を信じていない。したがって、神、天国、永遠の生などは苦手である。この点はイワンに近いが、人神など思いも浮かばない。ゾシマ長老が賛美するヨブの話も受け入れられない。私には永遠の生はない。しかし、私から見れば、キリスト教を信じている人も永遠の生を得ることはないだろう。たとえ砂漠でイナゴやバッタで命をつなぎ修行をしても結果は同じだろう。来世があるかないか、それは証明も反証もできない問題だ。私は脳が滅ぶ時にわれわれは無に帰すると思っている。それでいいではないか。私は別に宗教を信じている人を非難、揶揄しているわけではない。信仰により心の平安を得られる人もいるだろう。それはそれで結構なことである。わたしでも『カラマーゾフの兄弟』を読んで、心穏やかになることがあるのだから。

ヒトを含め生物は一般に、個体として、種として、できるだけ長くこの地球に存在しようとする。食物を摂取し、子供をもうけ育てる。それによって得られる様々な快の感情は生にとって重要で、大切にすべきものだ。碧い空や春の新芽は尊いというイワンに、アリオシャは無条件で生を愛せという。それで十分で、神の出番はなくてもいいようにも思われる。神がいなければすべてが許される、とは考えない。神がいようとまいと他人を殺したり、苦しめたりするのはいいことでない。私は理由なく殺されたくないし、苦しめられたくないから。それは生物としてのヒトの原則に反する。また、ある行為を皆がやったらどういうことになるかと考えるのもいいだろう（少数者を尊重しなければならない場面もあるだろうが）。皆が殺人を始めたら、最後には誰もいなくなる。これはゾシマ長老が言ったことだが、神様ぬきでもそう考えることはできる。進化の過程でヒトは他人の心を自分の中に再現させる能力を身につけた（「心の理論」。本ホームページ『脳と心』参照されたい）。例の **Golden Rule** の基盤だろう。

IV. 現代に生きるドストエフスキー

A. 革命

私は学生運動が盛んな時期に大学や大学院に在籍した。しかし、性格上、外部世界に関心が向かなかつたので、まったくのノンポリで過ごした。大学に勤務した時、職場には大学紛争の影響が残っていた。積極的に活動した同僚が何人かいたようだったが、かれらが「革新的」であるという印象は全く持てなかつた。などと、どうでもいい昔話をしたが、要するに宗教と同じように政治も苦手と言いたいのだ。したがって、簡単に済ませたい。流刑後のドストエフスキーは革命に批判的で、とくに『悪霊』では活動家を辛辣に描写している。

すでに述べたが、『未成年』の中で主人公の「父」であるヴェルシーロフは言う。この体制はいずれ無産階級によってとって代わられるだろう。しかし、その体制もいずれ別のものによって代わられるだろう、と。これはソヴィエト連邦の崩壊、その衛星諸国の政権交代として実際に起こった。シガリオフとピョートル（そして、大審問官）が描いた革命の未来像は、共産主義国家における党の一握りの指導者と一般人民の関係を予見している。スターリンの大粛清、毛沢東の文化大革命、ポル・ポトの大虐殺。スターリン、毛沢東の場合は、一握りの指導者の間の争いが含まれる。その過程で、ポル・ポトの場合も含め、多くに知識人が虐殺され、あるいは自己批判を強要された。密告は大いに奨励され（毛沢東を批判した母親が子供によって密告され、銃殺されたそうだ）、それは現在も続いている国があるようだ。これらはすべてドストエフスキーが見通したことだ。ドストエフスキーが亡くなって130年。かれが考えたことは今でも有効だ。正しく「最年長の同時代人」である。

話はずれるが、オムスクの要塞監獄でドストエフスキーに優しくしたのは、ロシアの埒外にいたコーカサスの回教徒だったように思う。一般民衆の囚人はドストエフスキーのような貴族階級（名ばかりだが）の囚人につらく当たった。現在でもロシアとコーカサスの諸国の間には紛争がある。2013年4月に起こったボストンマラソン爆破事件の犯人兄弟はチェチェン人だった。かれらの一家は一時ダゲスタンにいたようだが、ここはアレイと兄たちの故郷だ。アレイは兄たちに絶対服従だったが、ボストンのツアルナエフ兄弟も弟は兄に絶対服従だったようだ。これらのニュースに接するたびに『死の家の記録』を思い出す。

B. 事件

ドストエフスキーは新聞を隅々まで読んでいたそうだ。特に、犯罪の記事に興味を持ち、裁判を傍聴していたという。以下、2008年に立て続けに起こった3つの事件について当時思ったこと、考えたことを書いてみる。その前に、それらの事件で犠牲になられた方々の無念を思い、ご遺族にお悔やみを申し上げる。

1. 土浦の無差別殺傷事件

2009年5月に前年3月に起こった土浦、荒川沖の殺人事件の初公判の報道があった。あの事件はドストエフスキーの読者には気になる点がいくつかあったと思う。

マスコミの報道によると、犯人・金川真大は死刑になることを目的に殺人を犯したという。なぜ自殺をしなかったのかと問われて、かれは自殺が「痛い」から避けたと答えたという。これはキリーロフの言っていることだ。しかし、死刑を含め、他者に殺される時には痛みはないのか。そんなことはないだろう。それゆえ、「痛いから自殺はしない」という言葉には、それ以上のものが含まれていると思われる。少なくとも、自分の最重要課題を自己の内部では解決できなかったようにみえる。キリーロフが問題にしている「あの世」について、かれはアチラで永遠にゲームをして過ごすつもりらしい。本当にそのように信じられるのなら、かれはこの点に関しては幸せだと言わざるを得ない。

かれは高校時代に若者向けの哲学書を読んだという。その中に、「死刑を覚悟するなら、すべてが許されている」という意味の一節があり、かれは心にとめたい。その書物の著者は、このような読まれ方を想定していなかっただろう。この文の後段はラスコーリニコフやイワン・カラマーゾフの言っていることに通じる。小説には社会的、宗教的な背景があったが、今回の件は個人的な動機にとどまっている。しかし、スメルジャコフの出現を考えると、ラスコーリニコフやイワンとこの被告の距離はそれほど離れてはいないだろう。小説では「選ばれた」者が犯した行為になっているが、報道によると、この被告は自分を選ばれた者と思っていたようだ。精神鑑定で自己愛性人格障害という診断を受けたという。かれに接見した記者とのやり取りをきくと、そのように鑑定されても仕方ないような気がする。しかし、かれはキリーロフのような「人神」にはなれなかった。

かれは公判中に失神したという。公判中ではないが、これはラスコーリニコフにも起こったことだし、イワンにももっと激烈な形で生じた。ラスコーリニコフは犯行前から自分が持ちこたえられないことを予感し、事実そうだったが、警察署での失神はこのような心情と無関係でないだろう。この点は自ら生み出した悪魔に散々に愚弄されたイワンも同じだ。今回の被告は記者の接見にも穏やかに応じ、善悪を超越しているような発言を繰り返しているが、なぜ失神するのだろうか？単に、疲労していた、緊張していたからではないように思えるが。

2013年2月、金川死刑囚の刑が執行された。

2. 秋葉原の無差別殺傷事件

2008年6月（2001年の池田小事件と同じ日に起こったが、偶然だろうか）にこの事件が起こった時に、『死の家の記録』の「命知らずな人々。ルカーチ」で紹介されている殺人者のタイプが思い浮かんだ。当時のロシアで決して珍しくなかったこのタイプによる事件は秋葉原の事件とよく重なる。

このタイプの犯罪者は、苦しい生活を我慢しつつ、普段はおとなしく暮らしているようだ。ところが、不意に身体の中の何かが切れたようになり、抑圧している者、迫害している者を殺してしまう。これは犯罪だが了解できる。ところが、その後が分からない。無差別的に、行き当たりばつりに多くの人を殺してしまう。「殺すのはだれでもよかった」のである。ドストエフスキーは、法律や権力を超えた無限の自由を楽しむ、恐怖から来る快感を楽しむ、自棄的に深淵に飛び込んで自らケリをつけようとする、といったことを考えている。また、監獄という特殊な環境内でも似たような事件が起こった。特殊であるが、世の中が硬直化し、流動性を失い、息苦しくなると、程度の差はあるが、社会は監獄と類似する面を持つかもしれない。監獄では、長い間おとなしかった模範的な囚人が、突然に暴れだすことがあるという。獄内で酒を飲んだり、暴れたり、喧嘩をしたり、他人を殺したりして、周囲を唾然とさせる。ドストエフスキーは、それは個性の激しい発現であり、卑しめられた個性を示そうとする願望であり、自分に対する憂愁であると考えている。管理され、抑圧された自由のない監獄での自由意志の爆発的な行使である、と。

秋葉原の犯人・加藤智大は派遣先の人を殺しはしなかった。その代わりに作業衣の紛失に関わる騒ぎやそれに続く欠勤がある。ここでかれの中の何かが変わり、後は報道されていることになった。北陸の刃物店でナイフを買うかれの明るい表情には違和感があった。切れてしまったものの明るさだろうか。かれが恐怖の快感を楽しんだかは分からないが、ある種の自由を満喫しただろう。また、自らに終止符を打とうという意志も感じられる。ドストエフスキーはこのタイプのその後も観察しているが、とても大きな事件を起こしたように見えないし、すっかりおとなしくなってしまうとのことだ。派遣やネット、秋葉原などいかにも現代日本の装いを纏っているが、このタイプは当時のロシアでは珍しくなかったようだ。最近、グアムでも類似の犯罪が起こった。犯人は弱々しく、秋葉原の犯人と似た印象を受ける。

これらの事件は『悪霊』の一場面を思い出させる。ステパン氏についてワルワーラ夫人がダーシャに話していたこと。ステパン氏は首をつるなどと言って脅すだろうが、本気にはいけない。でも、油断をしてはいけない。もしかすると本当に首をつるかもしれないから。力が余ってつるのではなく、力が足りなくて首をつることが、ああいう人にはあるから。だから最後のぎりぎりのところまで追い詰めてはいけない、と。

「切れる」行動の脳機能を研究すればその答えが見つかるのだろうか。われわれの行動の基礎に脳があるからそのように考えるのだろうか、なんとも短絡的である（このホームページの『脳と心：認知神経科学入門』第1章を参照されたい）。脳による行動の説明は、行動によって説明された脳の機能に基づいて行われるのが一般的である。たとえば、「切れ

る」行動を例にとるならば、それは「抑える」行動のたがが外れた状態と考える。その場（研究では実験の場）で出やすい行動や、すでに遂行している行動を抑えるときに活性化する脳の領域を見出すことになる。そのような領域が右の前頭葉の下部にあるといわれているが、その行動を抑える傾向を強めるように実験条件を設定すると、たしかにその領域の活性化も増大する。つまり、その脳の領域の行動抑制の機能は行動によって説明されているのである。この行動によって説明された脳機能で、「抑える」さらには「切れる」という行動を説明している。それらの研究は「切れる」行動の説明の場を移しかえただけで、真の原因を明らかにしているわけではない。そこから、「近頃の若者は・・・」とか「最近の教育は・・・」といった議論へと飛躍したりする。ところが、最近は中高年も切れることが多いのである。さらに、19世紀のロシアでもこのような暴発がしばしば見られたことは、最近の教育や育児の問題ではないことを示している。社会的における様々な格差の増大、流動性や自由の減少、息苦しさなどを解消する施策が必要だろう。

なお、加藤被告は一、二審の死刑判決を不服として、最高裁に控訴した。

3. 元厚生次官殺傷事件

2008年11月、昔の厚生次官や家族が襲われる、奇怪な事件が起こった。犯人・小泉毅が述べている動機は、子供時代に飼い犬が保健所に捕獲され殺処分されたことへの報復である。以前、動物に優しく接することは人間に優しく接することにつながる、という意味のことを述べた。容疑者の語っていることが真の動機であるならば、動物に優しく接するがゆえに人命を抹殺してもよい、ということになる。また、アメリカで人工中絶に反対する者が中絶手術をした医者殺害したという。胎児の命を守ることと、医者命を絶つことが直接的に結びついている。崇高な思想、観念を持ったがゆえの卑劣な犯罪。これらの犯人たちは「別のこと」を言っていたのではないのだろうか。

目的が何であれ、動物を虐待する人間や研究は排除されてしかるべきだ、という考えがある。動物を愛する「心優しい人」の中には、ヒトと他の動物の間に区別を設けるべきでないと考える人たちがいる。これらの「心優しい人」たちにとって、殺人と食用のために牛や豚を殺すことは同列となる。人が殺さるべきでないのなら、動物も同じ権利を持つ、と。自らを律する「心優しい人」たちは肉食主義者になり、実験動物の犠牲の上に築かれた医療や薬品を拒否する。イワンは子供をイヌに引き裂かせた領主を許すことができない。「心優しい人」たちの中にも、動物を「虐待」する者を許せない人たちがでてくる。これらの「心優しい人」たちは実力で動物を「解放」したり、そのように動物を扱う人たちを攻撃したりする。中には傷害にまで発展した事例もあると聞く。

これらの「心優しい人」たちは必ずしも動物に詳しくなく、かれらの考えは観念的な面が強く、その観念に行動が支配されている。「きみが思想を呑んだのでなく、思想がきみを呑んでしまった。」これは『悪霊』でピョートルがキリーロフを評して言った言葉だ。多くの原理主義的な考えを持った犯罪者に当てはまるように思う。私は肉食をするし、ヒトが

ドストエフスキーを読むー『カラマーゾフの兄弟』を中心にー
小嶋 祥三

個体や種の維持のために開発した畜産、水産、牧畜、農業などの様々なシステムを素晴らしいものと思う。私は病気になれば医者にかかるし、薬も飲む。医学、薬学、その他さまざまな産業が達成したものに敬意を払う。一方で私は動物を含む自然が保全、保護されることを好ましいと思うし、家畜や実験動物の苦痛はできる限り減少させることに賛成である。真っ白でも真っ黒でもない灰色である。要するに、動物愛護、動物福祉の立場で、「心優しい人」は生ぬるいと攻撃するかもしれないが、妥当なものだと思っている。動物の権利を主張する人々が、権利を有する者が持つべき義務に言及しないのはどういうことか。やはり「別のこと」を語っているのだろうか。

なお、小泉被告は一、二審の死刑判決を不服として、最高裁に控訴した。